現場が語る公認会計士のキャリア形成

〜監査の魅力とやりがい〜

令和4年4月1日発行（毎月1回1日発行）
「会計・監査ジャーナル」2022年4月号（通巻801号）別冊付録

『会計・監査ジャーナル』別冊の発刊にあたって

日本公認会計士協会会長　手塚（てづか） 正彦（まさひこ）

このたび、『会計・監査ジャーナル』別冊の第４号を発刊いたしました。会計・監査ジャーナルでは、これまで、様々な地域や分野で活躍する公認会計士を取り上げてまいりました。今回は、監査業務に焦点を当て、監査法人で活躍する公認会計士をご紹介します。

昨今、公認会計士を取り巻く環境は大きく変化しており、約33,000人(2021年12月末現在)を数える会員の半数以上が監査法人に所属しておらず、監査以外のフィールドで活躍しています。このように、公認会計士の活躍の場が広がる一方で、公認会計士の独占業務である監査を主な仕事とする会員の割合は減少傾向にあり、公認会計士による監査対象も広がっている状況において、将来にわたり高品質な監査を維持していくために、監査の担い手を十分に確保することが重要な課題となっています。

このような課題認識に基づいて、本冊子では、監査というフィールドで日々頑張っている公認会計士に焦点を当てました。読者の皆様には、監査の社会的意義、仕事としての監査の魅力、そして、プロフェッショナルとしてのキャリアにおいて監査法人で働くことの価値を感じていただけるのではないかと思います。

インタビューでは、監査法人に所属している、年齢・職位・得意分野の異なる10名の会員からお話を伺いました。どの会員も監査業務をキャリアの軸に据え、各々が思い描いたキャリアを監査法人というフィールドで実現しようとしている姿が印象的でした。インタビューを通じて、監査法人では海外も含め多様に活躍でき、柔軟な働き方をサポートする制度も整備されており、監査法人で活躍することの魅力を強く感じることができました。

また、監査業務やIPO支援の分野で思い描いたキャリアを実現するために、中小監査法人で活躍している会員にもインタビューし、中小監査法人ならではの魅力を業務内容や組織体制の面など様々な観点から語っていただきました。

このほか、公認会計士監査との関係が深い方々から、公認会計士や監査への期待、要望などをテーマとしてご寄稿いただきました。寄稿文では、公認会計士の担う業務の重要性に言及がなされているほか、公認会計士に対するエールもいただいており、改めて公認会計士や監査に対する期待の高さを実感いたしました。

監査の現場で日々業務に従事している会員・準会員の皆様には、本冊子を通じて、監査業務の魅力を再確認していただけますと幸いです。また、学生の皆様や自身のキャリアを見直している社会人の皆様には、監査業務の社会的意義、将来性そして監査法人で働くことの魅力を感じていただき、ぜひ公認会計士資格の取得に挑戦し、監査というフィールドに飛び込んできていただきたいと思います。

最後に、本冊子の製作にご協力いただいたすべての関係者の皆様に心より御礼申し上げます。

CONTENTS

現場が語る公認会計士のキャリア形成
～ 監査の魅力とやりがい

日本公認会計士協会会長　手塚 正彦
『会計・監査ジャーナル』別冊の発刊にあたって

04　EY新日本有限責任監査法人　シニア　安田 恒星
移住プログラムを通じて
新たなワークスタイルを実践

08　有限責任 あずさ監査法人　シニア　海老瀬 有希
監査法人の支援制度を活用して
思い描いていたキャリアを実現

12　有限責任監査法人トーマツ　マネジャー　森 沙織
DX化の推進を通じて
新しい監査の世界を追求する

17　EY新日本有限責任監査法人　マネージャー　津髙 大
上場へ向けて
企業と伴走する中で成長を実感

22　有限責任 あずさ監査法人　マネジャー　宮上 豪
国際業務の経験をキャリアの軸に据え
新たな業務に積極的にチャレンジ

26　有限責任監査法人トーマツ　シニアマネジャー　滝 雅弘
飽くことのない監査業務への探求心

「会計・監査ジャーナル」2022年4月号 別冊付録
本誌掲載の写真、記事の無断転載を禁じます。

31 PwCあらた有限責任監査法人　パートナー　宍戸 賢市
監査法人のパートナーとして
監査業務が提供できる付加価値向上を目指す

36 太陽有限責任監査法人　パートナー　花輪 大資
海外への挑戦で得た経験が
キャリアの武器となる

41 監査法人 東海会計社　代表社員　片井 悠太
中小監査法人で、
さらなるキャリアアップを実現

45 双研日栄監査法人　代表社員　箕輪 光紘
監査法人には
自分で考え、活躍できる場がある

コラム

16 会計監査確認センター合同会社 代表職務執行者社長　丸地 肖幸
監査DX支援により日本の監査業務変革の基盤となる

21 株式会社東京証券取引所　取締役専務執行役員　小沼 泰之
IPOにおける公認会計士の皆様への期待

30 日本CFO 協会　主任研究委員、カルビー株式会社監査役　石田　正
監査法人に勤務する公認会計士の皆さんに期待すること

35 日本監査役協会専務理事　後藤 敏文
資本市場の健全な発展に向け、会計監査や公認会計士へ期待すること

40 国際会計士連盟（IFAC）ボードメンバー　觀　恒平
グローバルで活躍する公認会計士を目指す人への期待

INTERVIEW 1

移住プログラムを通じて新たなワークスタイルを実践

EY新日本有限責任監査法人
シニア
安田 恒星（やすだ こうせい）

INTERVIEWER
機関誌編集委員会委員
松田 由貴（まつだ ゆき）

多様な知識や経験を得られる監査業務

キャリアの選択肢の幅広さに魅力を感じる

松田　公認会計士を目指したきっかけを教えてください。

安田　高校への通学路に公認会計士試験の受験予備校があり、当時から何となく公認会計士の存在を意識していました。

数字を扱う職業に就きたいという思いから、大学の商学部に進学後、受験予備校の説明会に参加しキャリアの選択肢の幅広さに魅力を感じたことから、公認会計士を目指すことを決意しました。

総合商社の監査業務に従事

松田　現在従事されている業務内容や、業務上で関心を持っている事柄について教えてください。

安田　監査法人へ入社後、現在に至るまで、総合商社の監査業務に従事しています。監査チームでは会計論点や事業セグメントに応じて業務が割り当てられており、毎年担当を変えながらさまざまな論点を経験することで、自身の対応領域を広げています。

また、現在は、総合商社のビジネスに影響のある資源価格の動向や、IFRS（国際財務報告基準）の動向に関心を持っています。

IFRSの最新動向のキャッチアップに注力

松田　IFRSの最新動向は、どのようにキャッチアップされていますか。

安田　私が監査を担当している総合商社では、単体財務諸表は日本の会計基準で作成されており、連結財務諸表はIFRSに基づき作成されていることから、両方の基準を勉強する必要があります。

IFRSの最新状況については、大枠は監査法人での研修で理解し、細かい会計処理や実務への落とし込みについては、担当企業から相談があったタイミングや期末監査など会計処理の是非について判断が必要な時期に、IFRSの原典を参照しながら適宜キャッチアップし、対応可能な分野を徐々に増やすよう心がけています。

自然豊かな三島でクオリティ・オブ・ライフ向上を実現

移住制度を利用して東京から静岡へ

松田　安田さんは、「EYフレリモ」の「移住プログラム」を利用して静岡県三島市へ移住し、監査業務に従事しておられますが、この制度の概要を教えてください。

安田　「EYフレリモ（Flex&Remote）」は従業員ひとりひとりの能力が最大限に発揮される柔軟な働き方を促進し、クライアントサービスの質を更に向上させることを目的としたEY Japan独自の制度です。多様性のある働き方とライフスタイルを実現させる取組みの一環として、地方への移住を支援する「移住プログラム」を試験的に実施しています。

全国の多様な移住先

松田　なぜ「EYフレリモ」の「移住プログラム」に参加しようと考えたのでしょうか。

安田　東京で生まれ育った私は、**かねてより都会から離れた地域で暮らすことに憧れを抱いており、そのことがプログラムへの参加を希望するきっかけ**となりました。

今回は、80名ほどの移住希望者の中から選考を経て、私を含めた約30名がパイロットメンバーとして選出されました。移住者は東京事務所の方のみならず、名古屋や沖縄など地区事務所の方が別の遠隔地へ転居するケースや、外国籍の方もいるなどバラエティーに富んでおり、移住先も全国津々浦々です。また、移住の動機も多彩で家族との時間を大切にしたいと、実家のある北海道へ移住された方もいます。

移住の決め手は趣味のサイクリング

松田　移住先として、三島を選択された理由を教えてください。

安田　所属法人の事務所がある東京へのアクセスの良さが理由として挙げられます。まずは新幹線の最寄り駅を候補地として絞り込んだ後、気候や食文化、自分の趣味などを考慮した結果、最もバランスがよいと感じたことから三島市を選びました。

特に決め手となったのが、趣味のサイクリングです。静岡県ではロングライドの大会が開催されており、富士山の周囲を走るルートや起伏に富

んだ地形など、サイクリングが楽しいエリアであることも、移住を決める決め手となりました。

東京と地方で働き方に違いはない

松田　三島では、どのような働き方をされていますか。

安田　普段はリモートで業務に従事していますが、緊急事態宣言が解除された2021年10月以降は、一定の対面コミュニケーションを推奨する監査法人の方針もあり、週1回程度のペースで出社しています。

業務内容は移住前と基本的に変わりはなく、**監査チーム内での対面でのコミュニケーションの頻度も首都圏在住のメンバーと大きな差はありません。**

法人全体においても在宅勤務が当たり前になりつつある今、**移住前後を比較して働き方の違いはそれほどない**と感じています。

自然を感じる環境で日々リフレッシュ

松田　三島を拠点として働く中で、どのようなメリットを感じていますか。

安田　一番のメリットは、クオリティ・オブ・ライフの向上であると感じています。私の住む地域は自然が豊かで、街の中を川が流れる風光明媚な景色が身近にあり、天気が良ければ自宅

三嶋大社前での写真。三嶋大社の周辺は現在も観光地として栄えています。

から富士山を一望することもできます。このような環境は東京出身の私にとって新鮮であり、**自然を感じながら生活することで日々リフレッシュでき、そのことがプライベートのみならず業務の質の向上にもつながっています。**

また、三島名物のうなぎや漁港で購入できる新鮮な魚など食生活においても楽しみが広がっています。

三島の魅力を知り、移住継続も検討

松田　今後は三島に定住するという選択肢もお考えですか。

安田　「EYフレリモ」の「移住プログラム」の応募者の中には永住を希望する方もいますが、私は応募当初、東京に戻ることを前提に考えていました。

しかし、自然豊かで住みやすい三島の魅力を知るにつれ、短い期間で東京へ戻るのは惜しいという気持ちが芽生えており、今後の選択肢については熟慮している段階です。

いずれにせよ、**今の仕事を続ける上で東京に住むことに必ずしもこだわる必要はないことを実感**しており、この制度を利用したことがきっかけとなり、働き方に対する視野が大きく広がりました。

働きたい場所で働くことを当たり前に

柔軟な働き方を社会へ広げたい

松田　「EYフレリモ」の「移住プログラム」を通して実現したいことはありますか。

安田　1年間のパイロット期間中に、移住先を拠点としたリモートでも問題なく業務に従事できたという実績を残すことで、このような柔軟な働き方が法人、ひいては社会全体へ広がっていくことへ貢献できればと考えています。

松田　今はリモート環境が整っていれば、場所を問わず働ける時代になりつつありますよね。

安田　私の周りにも、子育ての環境を重視して都内から他県の郊外に移住された方がいます。コロナ禍によりテレワークが当たり前になったことで、働き方の選択肢が広がり、また、移住後も従来の仕事を継続しやすくなり、移住に対するハードルは下がったように思います。

これまでは一般的に移住というと、地域貢献が求められる風潮もありましたが、今は**もっと柔軟に「自分が働きたい場所で働く」という新しいフェーズへ移行している**のではないでしょうか。

監査法人の就業環境は整備されている

松田　監査法人への入社前、今のように充実した働き方ができるというイメージはありましたか。

安田　正直なところ、学生時代は、公認会計士に対して特に柔軟な働き方ができる印象はありませんでした。

しかし、実際に監査法人に入社すると、もちろん繁忙期が大変であるのは間違いないですが、良い意味でイメージが覆りました。

監査法人では毎年、就業環境の改善が進められており、ワークライフバランスを取りやすい環境が整えられています。

また、「EYフレリモ」をはじめとする取組みが進められており、柔軟な働き方を実現するための環境も整備されていると思います。

柔軟に就業時間を決めることができる

松田　柔軟な働き方を支援する監査法人の各種制度の中で、特に興味をお持ちの制度について教えてください。

安田　私の所属する監査法人には、7時間の就業時間の枠内で勤務時間や休憩時間を自主的に

決めることができる制度があります。自身の状況に応じて柔軟に就業時間を設定できる観点で非常に良い制度であると感じています。

生活の状況に応じて、効率的な業務スケジュールを組むことができ、ライフワークバランスと業務の質の向上へ与えるメリットが大きいと感じています。

チームをリードする存在を目指す

松田　今後のキャリアについてどのような展望をお持ちですか。

安田　目標の１つは海外の事務所への駐在です。

私の所属する監査チームでは総合商社を担当しており、海外の事務所とやり取りを頻繁に行っていることもあり、毎年、監査チームのメンバーが海外の事務所に赴任しています。

その方々が帰任後、中心的な立場でさまざまな企業や海外の事務所とやり取りをする姿を間近で見て、憧れを抱くようになりました。そうした活躍されている方々に少しでも近づけるよう、まずは海外駐在を経験し、監査チームをリードしていけるような存在になることを目指しています。

人との繋がりがより重視される時代へ

監査業務を通じて視野を広げることができる

松田　これまでのご経験から、監査法人や監査業務の魅力はどのような点にあると思われますか。

安田　監査を通じてさまざまな企業を深く知り、社会情勢に強い関心を持ち、視野を広く物事を捉えられるようになる点は監査業務の大きな魅力であると思っています。

また、監査法人に勤務する同僚や先輩、また、被監査会社の職員の皆様はとても能力が高い方が多く、よい刺激を受ける機会に恵まれていると感じています。

スムーズにコミュニケーションを取れる環境整備が必要

松田　柔軟な働き方が進む一方で、対面で接する機会が減少していますが、この点についてどのようにお考えですか。

安田　テレワークがもたらすメリットは大きい

ですが、コミュニケーションの必要性は今まで以上に強く感じています。やはり直接会うことで気軽に話せる部分もあると思いますし、対面と非対面のバランスをとることが重要であると考えています。

さらに今後、私が実践しているような好きな場所で働くというスタイルが社会に根付いていくとすれば、リモートでも対面と変わらず、よりスムーズにコミュニケーションできる環境を整備することが求められると感じています。

読者へのメッセージ

監査法人には安心して働ける環境がある

松田　公認会計士を目指す学生や公認会計士試験合格者の方々へメッセージをお願いします。

安田　監査法人では、今回ご紹介した「移住プログラム」だけではなく柔軟な働き方を支援する取組みを積極的に推進しています。

出産や育児、介護など、ライフステージの中でキャリアが途切れることに懸念をお持ちの方がいらっしゃるかもしれませんが、私の周りには、産休･育休から復帰されて、以前と同じ立場や業務で活躍されている方々が多くいます。

監査法人では安心して働くことができる環境をしっかり整備していますので、安心してこの業界に飛び込んできていただきたいと思います。

INTERVIEW 2

監査法人の支援制度を活用して思い描いていたキャリアを実現

有限責任 あずさ監査法人
シニア
海老瀬（えびせ） 有希（ゆき）

INTERVIEWER
機関誌編集委員会委員
池田（いけだ） 太洋（たかひろ）

長期的なキャリアを考え監査法人へ

銀行勤務時代に公認会計士を目指す

池田　公認会計士を目指したきっかけについて教えてください。

海老瀬　学生時代に会計学や経営学を専攻していたこともあり、大学卒業後は銀行に就職し、信用調査や財務分析を行う部署に勤務しました。銀行に勤める中で、業務のクオリティ向上のため、会計に関する知識をより深く身に付けたいと考えていました。

その後、夫の海外赴任へ同行するために銀行を退職した際に、より深い会計の知識を身に付けたいと思っていたこと、また、自身のキャリアにプラスになることに挑戦したいという思いから公認会計士を目指すことを決意しました。

日本で活躍するために公認会計士資格を取得

池田　日本の公認会計士試験の受験を目指した理由を教えてください。また、海外滞在中はどのように試験勉強をされていたのか教えてください。

海老瀬　海外の会計士資格の取得も選択肢としてありましたが、帰国後に日本で働くことを想定していたことから、日本の公認会計士資格の取得を目指しました。海外には受験予備校の校舎はありませんので、主に通信講座を利用して勉強していました。

前職で得た一定の会計知識があり、1から勉強を始める方よりも比較的取り組みやすかったこともあり、海外滞在期間中に試験に合格することができました。

金融機関の監査業務に従事

池田　現在従事されている業務について教えてください。

海老瀬　帰国後、2017年1月に監査法人へ入社し、金融事業部（現在の金融統轄事業部）に所属しています。主に金融機関の監査業務に従事しており、被監査会社の子会社や関連会社の監査業務では監査現場の取りまとめ役を担っています。

大手監査法人で選択できる未来

池田　日本へ帰国された後に銀行への復職ではなく監査法人への入社を選択した理由を教えてください。

海老瀬　理由は２つあり、１つ目の理由は、夫が再び海外へ赴任する可能性もある中で、ネットワークファームに属する大手監査法人であれば、夫の赴任先でも公認会計士として働くことができるのではないかと考えたからです。

そして、２つ目の理由は、銀行に勤めていたころから企業再生に携わりたいという想いがあったからです。

監査法人にはアドバイザリーやコンサルティングなど監査以外にも多様な業務の選択肢があり、企業再生のように、専門知識を駆使して企業をサポートする業務にも幅広く触れる機会があるのではないかと思ったのです。

時短勤務で家庭と仕事の両立を実践

監査法人の支援制度を活用

池田　育児休暇を経て、現在は時短勤務を選択されているそうですが、制度の概要を教えてください。

海老瀬　私が利用しているのは「フレキシブル・ワーク・プログラム」という、仕事と育児や介護を両立させながら、段階的にフルタイムの勤務へ戻り活躍できるようにサポートする制度です。

希望すれば女性だけでなく男性職員も申請でき、承認が下りれば勤務時間を柔軟に設定することが可能となります。私は、勤務時間を6時間から7時間に設定し、基本的に残業はしないという働き方をしています。

家庭と仕事を両立するために制度を活用

池田　出産・育児といったライフイベントでは、キャリアをいったん中断するといった選択肢もありますが、仕事を継続することを選択した理由を教えてください。

海老瀬　以前から、家庭と仕事を両立し、キャリアを継続していきたいと考えていたことが理由として挙げられます。

支援制度を利用している方が多く、職場の周囲からも制度利用について理解があったことから、家庭と仕事を両立することを前提に今後の働き方を検討することができました。

私には監査法人に入所した時点で子どもが1人いましたが、当時は自身の成長のため、あえて支援制度を利用せずに監査業務に臨みました。そのときは監査チームのメンバーの理解を得て、繁忙期以外は残業をせずに定時退勤する働き方となっていましたが、その後、2人目の子どもを出産したタイミングで「フレキシブル・ワーク・プログラム」を活用することとしました。

制度を利用しやすい環境が整備されている

池田　職場の方々からも理解があったとのことですが、制度を利用しやすい環境が整っていますね。

海老瀬　2人目の子どもの育児休暇から復職する際に、上司である監査法人のパートナーから制度の利用を勧められるなど、**支援制度を利用しやすい環境が整っており、周囲の方々のサポートによって家庭と仕事の両立が実現できている**と感じています。

特に監査チームの方々には、業務面においても日頃からご協力いただいており、忙しい時期などは心苦しく思うこともありますが、非常に感謝しています。

効率的に業務をこなすことで余裕が生まれる

池田　日々の業務スケジュールを教えてください。また、時短勤務の中で業務効率化のために心がけていることがあれば教えてください。

海老瀬　現在はコロナ禍ということもあり、リ

モートワークを中心とした業務形態となっていますので、朝に子どもを保育園に送り届けた後、9時過ぎから1時間の休憩を挟み、16時過ぎまで自宅で働いています。

被監査会社からの急な相談など突発的な業務が発生することもありますが、基本的には限られた時間の中で業務を終えられるよう事前にスケジューリングし、タスク管理することを心がけています。

短時間で集中して仕事をすることにより、これまでよりも育児・家事等の時間に余裕が生まれてくるようになり、このことが精神的な余裕にもつながっています。

リモートワークによりもたらされる恩恵

池田　リモートワークを中心とした働き方となっているとのことですが、リモートワークのメリットについて感じていることを教えてください。

海老瀬　リモートワークという働き方には多くのメリットがあると思います。通勤時間を削減できるだけでなく、子どもの体調不良で保育園から呼び出しの連絡があった際もすぐに迎えにいくことができ、子どもの様子をより早く確認できることは安心感につながっています。

柔軟な働き方でキャリアアップを目指す

監査経験に裏打ちされた幅広い知識・スキルに脱帽

池田　公認会計士試験合格前と現在で公認会計士の業務に対するイメージに変化はありましたか。

海老瀬　銀行に勤務していたころ、所属していた部署に公認会計士の方が監査法人から出向する形で在籍されていましたが、会計・監査の知識の幅や深さが自分たちとは全く異なり、プロフェッショナルの凄さを実感していました。

その後、公認会計士として企業からの相談を受ける立場になり、銀行に勤務していたころに出会った公認会計士の方は、幅広い監査業務の経験の中で、多様な知識やスキルを身に付けていたのだということを理解できました。

公認会計士の資格取得はゴールではなく、その後の監査業務での経験を通じて、会計・監査の知識やスキルを磨き上げていくことの大切さを身にしみて感じています。

監査業界の先進的な取組み

池田　監査業界では柔軟な働き方を実現するべく制度の整備が進められていますが、この点について他の業界よりも先進的であると感じることはありますか。

海老瀬　監査という業務の性質上、あらかじめ年間計画が明確かつ綿密に決まっており、基本的なタスクの把握やスケジューリングがしやすい点は、他の業界よりも進んでいると感じています。先々の計画が立てやすいので、出産・育児や介護などライフステージの変化にも対応しやすくなります。

また、監査法人では、監査手続の見直しやデジタル技術の導入等により業務の効率化が図られ、働きやすい環境の整備が着実に進められていると思います。

そして、私の経験談となりますが、復職する際に希望した職務にスムーズに戻ることができ、**1人ひとりの希望する働き方に合わせたキャリア選択ができる環境が整えられている**点も優れていると感じています。

多様な選択肢からキャリアを模索

池田　今後のキャリア展望について教えてください。

海老瀬　今は家庭と仕事を両立しつつ、着実に監査業務の経験を積み重ねていきたいと考えています。

子育てが落ち着いた後のキャリアについてはまだ模索中ですが、大手監査法人には監査業務以外にも多様な業務の選択肢があり、働く場所も国内に限定されないと考えています。

監査業務を通じて幅広い知識やスキルを身に付けた後、監査法人のアドバイザリーやコンサルティングの部門等で企業再生の仕事に携わることも視野に入れています。

求められるのは、新たなことに挑む力

社会や企業からの期待に応える仕事

池田　監査業務に対して、忙しく定型的な業務だという印象をお持ちの方もいらっしゃいますが、この点についてどのように感じていますか。

海老瀬　確かに繁忙期などは業務に追われることもありますが、業務効率化が進む近年では、ルーティンな作業は非常に少なくなっていると思います。

　むしろ昨今は、過去と同じ業務をこなすだけではなく、会計・監査基準の改正への対応や新しい形態のビジネスに内在するリスク評価など、日々変化する状況の中で悩みを抱える企業に寄り添い、サポートしていくことが重要であると考えています。

　私自身、企業から相談を受けるごとに最適な対応を模索する日々を過ごしていますが、社会や企業からの期待に応える仕事をしたいという思いがモチベーションとなっています。

新しい知識を身に付け、積極的なチャレンジが必要

池田　DXが進展する時代において、公認会計士がさらに社会へ存在感を示していくために何が必要であると思われますか。

海老瀬　今後、公認会計士が社会の期待に応えていくためには、会計・監査の知識のみならず、DXやSDGs、気候変動などの社会的課題に対しても幅広い知識を身に付けていくことが、より一層重要になってくると考えます。

　加えて、今後より一層の業務効率化が進むにつれ、公認会計士の業務はこれまで以上にクリエイティブなものになると思います。この変化に対応するために、新しい分野に積極的にチャレンジする姿勢が重要になってくると思います。

多様性のある環境が整備されている

池田　近年、大きな社会的課題としてダイバーシティ（多様性）の推進が挙げられていますが、監査法人における状況はいかがでしょうか。

海老瀬　大手監査法人ではパートナーや管理職が女性の方ということは珍しくなく、また、組織の中に多様なバックグラウンドを持つ方が増えています。

　目指すべき目標となるロールモデルが多いことは、自身のキャリア形成について大きな意味を持ちますし、多様性のある働きやすい環境づくりは確実に進んでいると感じています。

読者へのメッセージ

監査法人にはキャリアを後押ししてくれる環境がある

池田　公認会計士を目指す学生や若手の公認会計士の方へメッセージをお願いします。

海老瀬　監査業界や公認会計士に求められるものは、ここ数年で大きく変化しています。さまざまな社会的課題に対して企業が対応を迫られている中、既存の業務にとらわれず、新しい知識や考え方を柔軟に取り入れていくことがより重要になります。

　公認会計士試験の合格はゴールではなくキャリアのスタート地点に当たります。専門知識を活かして積極的に新しいことに取り組んでいくという意欲をぜひ持っていただきたいと思います。

　また、監査法人では柔軟に働くための制度が整えられており、思い描いているキャリアの実現を後押ししてくれる環境があります。ぜひ、希望を持って監査の世界に飛び込んできていただければと思います。

INTERVIEW 3

DX化の推進を通じて新しい監査の世界を追求する

有限責任監査法人トーマツ
マネジャー
森（もり） 沙織（さおり）

INTERVIEWER
機関誌編集委員会委員
倉重（くらしげ） 栄治（えいじ）

コンサルタントから公認会計士へ

将来を見据えて資格取得を決意

倉重　公認会計士試験の受験を目指したきっかけについて教えてください。

森　高校生のころに生命や病気の仕組みに興味を持ち、大学では農学部で生命科学を専攻していました。学びを深める中で、医療分野のコンサルティングの道に進みたいと思うようになり、デロイト トーマツ コンサルティング合同会社に入社しました。

公認会計士という職業を知ったのは、コンサルティング業務で公認会計士の方々と一緒にお仕事をしたことがきっかけです。会計に関する幅広い知識をもとに的確な助言をされている姿をみて、会計知識の必要性を痛感すると同時に、会計の面白さに惹かれていきました。また、公認会計士は結婚・出産等のライフイベントを経ても仕事を続けることができることに魅力を感じ、公認会計士の資格取得を目指すことを決意しました。

倉重　コンサルタントの仕事を続けながら試験勉強をされたのでしょうか。

森　当初は仕事と試験勉強を両立する生活を続けておりましたが、効率よく勉強を進めるため、仕事を辞めて試験勉強に専念しました。仕事を辞めたことから不安やプレッシャーを感じることもありましたが、公認会計士試験に合格できたことが、自分の人生における大きな転機であったと思っています。

マネジャーとして多彩な業務に従事

倉重　現在従事されている業務について教えてください。

森　ネット系・テレコム系を中心に、さまざまな業種・規模の企業の監査業務に従事しています。また、デジタル関係の分野に関心があり、監査業務のDX化の重要性を強く認識していたことから、**監査部門におけるデジタル人材の育成や監査業務のDX化を推進するCPA-Techという活動にも参画**しています。

仕事も子育ても楽しむように心がける

倉重　お子様が２人いらっしゃるそうですが、仕事と子育てを両立される上で、日々心がけていることはありますか。

森　仕事も子育てもチームワークを常に意識し、積極的に人に頼ることを心がけています。監査業務は必ずチームで動きますので、仕事の全てを1人で背負う必要はありません。監査チームのメンバーと協同で仕事を進めるようにしています。また、子育てについては、夫と協力することはもちろん、保育園や習い事などをフルに活用しております。仕事も子育ても100点を目指すのではなく、周囲の助けを得ながら楽しむことを心がけています。

DX化により監査業務が大きく進化する

現場で求められる質問力や伝達力

倉重　公認会計士を目指していたころと現在で、公認会計士に対するイメージに変化はありましたか。

森　公認会計士には、財務データや会計・監査の基準に従って業務を行い、常にデスクでパソコンの画面と向き合っているという印象がありましたが、実際は企業や監査チームのメンバーとコミュニケーションする時間が多く、質問力や伝達力が大いに求められると感じました。また、決められた手続きを繰り返し行うことが多いというイメージを持っておりましたが、専門家として考え、判断すべき領域が幅広いことを実感しています。

変化への対応は公認会計士の責務

倉重　現在の業務において苦労されていること、また、それをどう乗り越えたのかを教えてください。

森　近年、会計や監査基準が目まぐるしく改正され、企業を取り巻く環境も日々大きく変化しています。公認会計士には、この変化する状況をとらえた的確な対応が求められますが、それは苦労ではなく、公認会計士として乗り越えるべき責務であると考えております。新たな会計基準をキャッチアップする労力は惜しみませんし、不明な点があれば諸先輩方に質問をしたり、アドバイスをいただく等で対応するように心がけています。

育児休暇からの仕事復帰も安心

倉重　育児休暇から仕事へ復帰する際に苦労されたことはありましたか。

森　私は産前休を含む約2年間の育児休暇を2

回、計4年間取得しました。その間に、会計や監査基準の改正、監査ツールの更新がなされていましたので、仕事に復帰してから以前のように働けるようになるまで半年間ほどかかりました。

現在は、産休・育休中の社員が最新の情報をキャッチアップできる仕組みを監査法人側で整備しており、よりスムーズに仕事へ復帰できる体制が構築されています。

DX化で監査業務の進化を実感

倉重　日々の監査業務の中でDX化の進展を肌で感じる場面はありましたか。

森　昔と違い若手の公認会計士から、実証手続で証憑突合作業に追われているといった声をあまり聞かなくなりました。また、分析的手続では、昔はエクセル等の表計算ソフトで処理できる程度のデータを分析していましたが、現在は、企業から提供される全量データから異常点を抽出し、その結果を検証するといった形に変化しつつあります。

このように**単純作業よりも、専門家として考え**

判断することがより求められるようになってきたことは、監査業務のDX化の進展によるものではないでしょうか。

リモート監査が当たり前の時代へ

倉重　コロナ禍の影響によって、働き方やコミュニケーションに変化が生まれています。企業やチームのメンバーとのやり取りで、DX化の影響を感じる部分があれば教えてください。

森　リモートでの監査はもはや当たり前になりつつあり、遠隔地の拠点に在籍するメンバーと協同して監査業務を進めていくケースが増えてきました。企業や監査チームのメンバーとの資料のやり取りが全てデジタル化され、会議はフルリモートで実施されるケースが増えています。

監査業務のDX化は必須事項

倉重　監査業務がデジタル化することのメリット･デメリットについて考えを教えてください。

森　メリットやデメリット以前の話となりますが、**監査業務のDX化を進める以外の選択肢はない**と感じています。社会や企業の変化に対応し監査業務も変化しますので、社会や企業でDX化が進展する中、監査業務もDX化に対応していく必要があります。

すでに多くのTMT業界(テクノロジー･メディア･通信業界)の企業はビジネスにDXを取り入れており、企業からDXを踏まえた質問や相談をいただくことがあります。**これからの公認会計士はDXの動向を常にキャッチしていくことが求められる**のではないでしょうか。

CPA-Techへかける想い

倉重　CPA-Techという活動をされていると伺いましたが、その内容はどのようなものですか。また、この活動へかける想いを教えてください。

森　CPA-Techとは、有限責任監査法人トーマツの監査部門におけるデジタル人材育成と監査業務のDX化の推進を目的した活動の総称です。被監査会社のIT環境の変化を適時に捉えるリスク識別･評価力、大量データからリスクを炙り出すためのデータ加工･分析企画力、監査ツールの開発や活用推進による監査の変革力、ERP知見に基づく監査高度化力とアシュアランス力、総合的なDX知見に基づくクライアントのDX化の推進力といった、複数の領域の活動があります。私は、これらのうち、データサイエンス領域において、人材育成のための研修の講師と、SQL等によるデータ加工と分析スキルを活用した監査業務のDX化の推進役として活動しています。

もともとデジタル関係の分野に興味があったことがCPA-Techに携わるきっかけでしたが、今ではこのような活動を通して自らもデータサイエンス領域の知識やスキルを高めたいという気持ちが芽生え、そうした思いが活動を続けるモチベーションになっています。

目の前の興味がキャリアにつながる

倉重　今後のご自身のキャリア展望について教えてください。

森　私自身は、「将来こうありたい」という理想へ向かって着実にキャリアを積むタイプではありません。それよりも、目の前の仕事に取り組みながら、興味あるものを見付けるとそれを夢中で深掘りし、振り返るとそこに自分の道ができているというイメージでここまで進んできました。今後もやりたいことに全力を注いでいれば、自ずとキャリアは拓けてくるものと思っています。

仕事の幅を広げ、専門性を高められるのが監査業務の魅力

積極的に新たな分野へチャレンジする

倉重　監査業務に対して「激務」「つまらない」という印象を持っている方もいらっしゃると思いますが、スタッフ時代からの経験を踏まえてどのようにお考えですか。

森　瞬間的な感情は別にして、振り返ってみると監査業務をつまらないと思ったことはありません。「つまらない」というのは、「仕事に慣れてきた」、「頭を使わなくなってきた」という意識に起因していると思います。特にスタッフの時代は、新しい知識や経験を吸収することが楽しい時期である一方、仕事に慣れてくると新たな気付きがなくなり自身の将来に迷いが出始めるのではないでしょうか。

私の場合は、現状の業務に慣れてきたと感じたら、「別の科目を扱わせてほしい」、「新たな手続について考えてみたい」と上司に申し出るようにしていました。このように、監査にはさまざまな業務があり、自ら積極的にチャレンジすることで仕事の幅を広げつつ、専門性を高めていけることが公認会計士の魅力であると思います。

DX化に対応し業務をリードする存在へ

倉重　ウィズコロナ・アフターコロナ時代を迎え、DX化がさらに進展する中、社会から公認会計士に対する期待にも変化が出てきていると思います。新しい時代を迎えるに当たって、公認会計士がさらに存在感を社会に示していくために何が必要であるとお考えですか。

森　これからの公認会計士は、DXについて理解することはもちろんですが、監査法人内のDXの専門部署に業務を委託するだけでなく、専門知識をベースに判断や指示をして、業務をリードできる存在になるべきだと考えます。実際にデータ分析に基づいて企業と話をすると納得していただけますし、そうしたことが新たな価値提供につながっていくように思います。私が携わっているCPA-Techは、まさに、そのための取組みであり、新しい監査の世界を追求することに大きな楽しみとやりがいを感じております。

読者へのメッセージ

公認会計士は専門性と汎用性を兼ね備えた稀有な資格

倉重　若手の公認会計士や、公認会計士を目指す学生へメッセージをお願いします。

森　私は、公認会計士は専門性と汎用性を兼ね備えている稀有な職業ではないかと感じています。公認会計士の業務は多様化していますが、**公認会計士の根幹ともいえる監査業務での経験が基盤となって、皆さんの世界は大きく広がっていく**でしょう。公認会計士という資格を活かし、自分の道を掴んでいただきたいと思います。

また、今、監査はＤＸ化によってとても面白い局面を迎えています。そして、公認会計士は、特別な部署にいなくても、監査の現場最前線でその躍動に触れスキルを習得できる状況にあります。ぜひその状況を楽しんで経験し、新時代の監査を一緒に作り上げていきましょう。

監査DX支援により日本の監査業務変革の基盤となる

会計監査確認センター合同会社 代表職務執行者社長 丸地 肖幸（まるち ゆきたか）

残高確認手続の重要性と共通課題の解決に向けて

企業の財務報告の信頼性を保証する会計監査業務において、企業の財務諸表項目を取引先等に直接確認することは、非常に重要な手続とされています。しかしながら、紙媒体の確認状の郵送・回答・回収といった作業には、会計監査人はもちろん、被監査会社やその取引先・顧客等の回答者の皆様にも多大な事務負担を要していることが、会計監査における共通課題の一つでした。

共通課題を解決するWebベースのプラットフォームの提供

会計監査確認センター合同会社は、このような共通課題の解決を図るため、大手監査法人の共同出資により2018年に設立した会社です。

当社の提供するBalance Gatewayは、Webベースでの確認手続を可能とするプラットフォームです。シンプルな操作で回答依頼、回答結果の閲覧ができ、インターネットに接続できればどこからでも利用できるので、これまでの実務に比べてより迅速な残高確認を実現するとともに、リモートワークのようなwithコロナ時代の働き方にも対応できます。

銀行Web確認機能の提供も開始

2022年1月末時点で大手4法人に加え約20の監査事務所と利用契約を締結し、累計30万件を超えるご利用を頂いています。高度なセキュリティ態勢で重要データを保護し、安心してご利用いただける環境を整えるとともに、継続的に利便性や機能の向上に取り組んでいます。2021年12月からは国内大手銀行の全支店に対するWeb確認機能の提供を開始しました。最新のBalance Gatewayでは、銀行名と支店名等を入力するだけで回答依頼ができる機能を搭載しています。今後、回答者である各金融機関や一般事業会社との連携を進め、一層ご利用いただきやすい環境を整えてまいります。

世界にも類を見ない監査法人共同出資会社として

監査法人がタッグを組み、共同出資により監査業務の共通化に取り組むのは世界でも前例がありません。監査のDXを進め、若い会計士の皆さんを単純作業から解放し、より付加価値の高い業務にシフトしていくことが会計監査業界には求められています。残高確認以外にも、共通の監査ツールやIT基盤の共同利用など、私たちが監査業界全体のDXに貢献できる分野は多く存在すると考えています。日本の会計監査業界の未来を自らの手で切り拓き、社会全体に価値を提供していくとの創業の精神を胸に、今後も取り組んでまいります。

INTERVIEW 4

上場へ向けて 企業と伴走する中で成長を実感

EY新日本有限責任監査法人
マネージャー
津髙（つたか） 大（ひろ）

INTERVIEWER
機関誌編集委員会委員
安原（やすはら） 徹（とおる）

監査業務を通じて監査の奥深さを実感

難関試験だからこそ挑戦したい

安原　公認会計士を目指したきっかけを教えてください。

津髙　大学時代、専門学校主催の公認会計士の仕事を紹介する講座に参加したことがきっかけで公認会計士という職業を知りました。当時は大学の受験勉強が終わり、何か新たに熱中できるものを探していた時期でもあり、公認会計士が難関資格であると知ったことから挑戦してみたいと思うようになりました。

IPO業務を通じて得た貴重な経験

安原　これまで従事してきた業務内容を教えてください。

津髙　監査法人へ入所後は、食品を中心としたメーカー、メディア・エンターテインメント系、IT系の企業の監査業務のほか、IPO業務にも従事してきました。

IPO業務ではインチャージを担当した2社の上場を果たすことができ、大変貴重な経験ができたと感じています。

インチャージ業務でスキルを磨く

安原　これまでのキャリア形成の中でどのようなことを重視してきたか教えてください。

津髙　スタッフのころからインチャージ業務を希望し、チャンスがあれば積極的に手を挙げるようにしてきました。監査の現場責任者として企業との窓口業務や、パートナーへの検討事項の相談など、自分が成長できる機会を自ら掴むよう心がけることで、多くの経験を積むことができました。

監査の奥深さに気付く

安原　公認会計士を目指していたころと現在で、公認会計士に対するイメージに変化はありましたか。

津髙　公認会計士試験の受験勉強をしていたころは、監査に対して特別な印象を持っていませんでしたが、実際に監査業務に従事し、監査は単純なものではなく、想像以上に奥深い仕事であることに気付きました。

　そのことが現在も監査業務を意欲的に続けている大きな理由にもなっています。

監査法人でのキャリアが成長につながる

スタッフのフォローと全体管理

安原　マネージャーに就任し、スタッフ、シニア時代と比較して変化を感じた点があれば教えてください。

津髙　マネージャーに就任すると、スタッフやシニアが行う業務に不足や間違いがないかを適宜チェックしながら、プロジェクト全体を管理するようになり、これまでとは全く違った視点で業務に従事するようになります。

　また、スタッフやシニア時代と異なり、監査手続で問題点を発見するだけではなく、それに対する解決策を提案することが求められるようになり、求められる業務の質も高くなっていると感じています。

新しいチャレンジにいち早く参画できる

安原　マネージャー職の面白さや楽しさはどのようなところにありますか。

津髙　監査法人では、新しいツールや新たな取組みを導入する際にパイロットメンバーを募集します。この募集の要件が、マネージャー以上の職位の場合が多く、パイロットメンバーに選ばれると、新しいツールや取組みを監査法人内で一番早く体験することができます。

　監査法人における前例にとらわれない新しいチャレンジに参画できることは、マネージャーという職位の楽しさの1つといえます。

最後の砦としての重責

安原　逆に、マネージャーとして業務に従事する中でご苦労されていることはありますか。

津髙　部下に任せている業務状況を把握し、チェック漏れがある場合は適宜フォローしています。監査業務を適切に遂行するための最後の砦のような役割であり、重責を背負っていることを実感しています。

　この役割をしっかりと果たすために、前倒し可能な業務はできる限り早く終え、繁忙期に突入した際に、少しでも時間と心に余裕を持てるように、業務のスケジューリングを心がけています。

高度かつ最新の情報に触れられる

安原　スタッフやシニアで監査法人を退職する方も少なくないと思われますが、監査法人という組織でより高い職位に就くことのメリットについて教えてください。

津髙　高い職位に就くことで、より高度な情報を素早く入手できるようになる点がメリットとして挙げられると思います。

　例えば、社会的な関心事として多くの企業で推し進められているDXについても、先端的に取り組んでいる企業からのリアルな情報を入手することができます。

高度かつ最新の情報に触れることができることにより、企業に対してより先進的な提案や指摘を行うことができるようになります。

携わる業務の意味をしっかりと考える

安原　マネージャーの立場で、スタッフやシニアに心がけてほしいことはありますか。

津髙　若い方には、監査業務に従事する際に、その業務を行う理由を考えることを意識してほしいと思っています。

例えば、監査調書を作成する際、前期の監査調書を参考にすると思いますが、当期もその監査調書に記載された事項をこなすだけで十分なのか疑問を持ち、不足していると思うのであれば自ら提案することが重要であると考えます。手を動かす前にまずは立ち止まって考えることを習慣化してほしいと思っています。

監査法人でキャリアアップを目指した理由

安原　昨今は上の職位を目指すというキャリア志向の方が少ないように思われますが、監査法人でキャリアを歩もうとした決め手を教えてください。

津髙　当初は、監査法人で上の職位を目指すつもりはなく、監査業務を4年から5年ほど経験した後、監査法人を離れ、例えば、CFOとして企業内で活躍するといったキャリアを漠然と思い描いておりました。

しかし、監査業務を通じて監査の奥深さに気づき、自分がまだまだ未熟であり、さらに高度な監査業務を経験し成長したいと思うようになったことが、監査法人でキャリアを継続する決め手になりました。

大企業・グローバル企業の監査にもチャレンジ

安原　今後のキャリア展望について教えてください。

津髙　スタッフ、シニアの時代からIPOを中心にさまざまな業務を任せていただき、プロジェクト全体をみる機会も多く与えていただきました。

さらに研鑽を積み、より大きな企業やグローバルな企業にも対応できるよう、キャリアを歩んでいきたいと思っています。

IPO業務ならではのやりがい

上場へ向けて企業と伴走する喜び

安原　キャリアの当初からIPO業務にも従事されていますが、監査業務とは違うIPO業務の魅力はどこにありますか。

津髙　上場企業とは異なり、IPOを目指す企業の中には、内部統制の整備が不十分な場合や適切な会計処理ができていない場合があります。IPO業務では、そういった企業が上場審査に耐えうる組織となるようにさまざまな助言や指導を行います。

通常の監査業務とは異なり、**経営者との距離が非常に近く、新しい組織を経営者と二人三脚**

で創り上げていくことができる点に大きな魅力を感じています。

IPOを目指す企業の特徴

安原　IPOを目指す企業の特徴について教えてください。

津高　IT系の業種が多いです。実際に私がIPOを担当し上場を果たした企業もIT系の業種でした。IT系の企業は、多額の設備投資や販売網がなくても安定してキャッシュを生み出す仕組みを構築できる点が理由であると考えています。

　また、企業の創業者は比較的若い方が多く、IT系の企業に勤務し、さまざまな技術を習得し人脈を築いた後に起業されることが多いように感じています。

「成長力」が重要なファクター

安原　一昔前は、大企業で培った独自技術を核にして会社を興すというケースが多かったようですが、近年、長く勤めた人の堅実な技術をもってしてもIPOに至らないことが多いのはなぜでしょうか。

津高　IPOを実現するために「成長力」が重要なファクターであり、若い人の方が成長にかけるエネルギーが強いことが影響していることが理由として挙げられるのではないでしょうか。

　また、ベテランの研究者・技術者は素晴らしい技術やノウハウを持っていますが、その技術やノウハウを製品化して大量生産することやマーケティング面で課題があるケースもあり、技術だけではIPOに至ることができていないのだと思います。

非ハード面のメリットを求めIPOを目指す

安原　企業がIPOを目指す目的についてどのようにとらえていますか。

津高　資金調達が本来の目的だと思われますが、最近は企業のイメージアップ、社会的な信用度の向上といった非ハード面のメリットを求める経営者も多いようです。

　上場を果たすと、取引先からの信用が得られ、企業のブランド力も向上し、企業のサステナビリティの重要な要素である、優秀な人材の採用にもつながります。

新時代に監査人に求められること

資本市場の番人としての責務

安原　監査業務に対して若干ネガティブな印象を持っている方もいらっしゃると思いますが、監査業務の魅力や社会的意義についてどのようにお考えですか。

津高　先ほどお伝えしたとおり、監査業務はとても奥深いものであり、業務を通じて幅広い知識と経験を得ることができる素晴らしいものであると感じています。

　また、IPOに目を向けると、企業が上場を達成した後に不正が発覚した場合に資本市場に与えるインパクトが非常に大きくなります。**上場を目指す企業の経営の健全性をしっかりとチェックし、上場後の不正発覚を防止することも、監査の社会的な意義**であると思っています。

非財務情報への保証の広がり

安原　経営・投資の分野では環境・社会・ガバナンスなどのESG要素が世界的に注目され、非財務分野に対する信頼付与が課題になっています。これについて、財務諸表への信頼付与に携わる監査人の立場としてどのようにお考えですか。

津高　将来的に監査業務においても合理的な保証を与える範囲が広がっていくと感じています。

　先般、監査報告書への監査上の主要な検討事項（Key Audit Matters：KAM）の記載が義務付

けられ、監査人がとくに注意を払った事項を投資家に開示するようになりました。

また、企業の年次報告書に含まれるその他の記載内容についても、これまでどおり通読を行うほか、その他の記載内容と監査の過程で得た知識との間に重要な相違があるかどうかを検討すること等が求められるようになるなど、非財務情報・記述情報の開示への監査人の関与が社会から期待されています

このような流れを考慮すると、**気候変動等の非財務情報にも将来的に何らかの保証を与える時代が到来すると考えられ、公認会計士が果たすべき役割も増えていく**のではないかと思います。

読者へのメッセージ

監査法人でさまざまな業務にチャレンジしてほしい

安原　公認会計士試験合格者や若手の公認会計士の方へエールをお願いします。

津髙　監査業務で得られる知識や経験は大変貴重で他の業務では得ることができない稀有なものであると思います。また、監査法人では、監査業務をはじめ多様な業務に携わる機会があり、さまざまなキャリアを選択することができます。是非、**長く監査法人に勤め、多くの業務にチャレンジし、自身にとってのやりがいを見付けていただきたい**と思います。

安原　監査法人で積み重ねた監査業務の経験は、皆さんのキャリアの幅や可能性を大きく広げてくれるものです。このインタビューを通じて監査業務に従事することの重要性を改めて知っていただけるとうれしく思います。本日はありがとうございました。

IPOにおける公認会計士の皆様への期待

株式会社東京証券取引所　取締役専務執行役員　小沼（こぬま） 泰之（やすゆき）

現在、東証には約3,800社の企業が上場し、日々、多くの投資家によってその株式が売買されています。近年のマーケットは活況を呈していますが、その背景となっているのが、好調なIPO（新規上場）です。2021年の新規上場会社数は136社でしたが、これは実に15年ぶりの高水準です。また、高い成長可能性を有する企業を対象とするマザーズへのIPOは、1999年の市場開設以来、最高の93社となりました。成長可能性のあるベンチャー企業をはじめ、数多くの企業に、資本市場から調達した資金をもとに成長を実現していただき、今後、日本経済の成長や豊かな社会の実現に寄与していくことが、我々、市場開設者の使命です。

投資家が上場会社に投資をするにあたり、投資判断上重要となる情報は多々ありますが、中でも財務諸表は、特に重要なものです。そして、投資家が安心して投資を行うためには、その財務諸表に適正性が確保されていることが必要です。仮に、財務諸表が適正に表示されていないかもしれないとの懸念が広がれば、投資家は投資を躊躇うこととなり、資金供給者である投資家と資金需要者である上場会社をつなぐ資本市場の機能が損なわれます。公認会計士による監査は、資本市場の健全な発展に欠かせないものといえます。

そして、この役割は、IPOの場面でも変わることはありません。上場準備のプロセスにおいて公認会計士による監査を受けることは必須であり、監査がなければ、IPOにより投資家の投資対象とすることはできません。好調なIPOは、公認会計士の皆様による監査に支えられているといっても過言ではありません。

特に最近は、AIやIoTなど、先端的な事業を営む企業のIPOも見受けられます。そのような企業に対しても適切に監査を実施するためには、新たな事業に対する深い理解がなくてはなりません。公認会計士の皆様による日々の研鑽により、未来の新たな産業は支えられています。

最後になりますが、新型コロナウイルスの感染拡大を契機として、企業を取り巻く環境は大きく変化しています。そうした変化に対して、企業のビジネスもまた変化を遂げていくものと考えられます。そうした変化の局面においても、公認会計士の責務を全うするために、弛まぬ努力を続けられている皆様に、敬意を表したいと思います。そして、国内外の投資家から信頼される資本市場をともに作り上げる仲間として、皆様が、引き続き、ご活躍されることを祈念しております。

INTERVIEW 5

国際業務の経験をキャリアの軸に据え 新たな業務に積極的にチャレンジ

有限責任 あずさ監査法人
マネジャー
宮上（みやかみ） 豪（ごう）

INTERVIEWER
機関誌編集委員会委員
曽木（そぎ） 貴子（たかこ）

国際業務を中心にキャリアを構築

公認会計士資格との出会い

曽木　公認会計士の存在を知ったきっかけについて教えてください。

宮上　大学入学を控えた春休みの空いた時間を活用し、公認会計士の受験予備校で簿記2級講座を受講し会計に触れたことがきっかけです。その後、将来を考えて何か資格を得たいと思い、大学の経済学部に通いながら公認会計士資格取得を目指して受験勉強を始めました。

経営の中枢に触れることができる

曽木　さまざまな資格がある中で、公認会計士を選択した理由を教えてください。

宮上　公認会計士は、監査業務を通じて多種多様な企業の経営陣から経営方針やビジョンについて考えを直接うかがうことができます。他の資格と比較して、より企業経営の中枢に触れることができる点に魅力を感じ、公認会計士を目指すことを決意しました。

シニア時代に海外駐在を経験

曽木　これまで従事されてきた業務内容について教えてください。

宮上　監査法人へ入所後は国際部門に配属され、2015年に法人内のシニア海外派遣プログラムに応募し、2年間のニューヨーク駐在を経験しました。帰国後は主にグローバルに展開する企業の監査業務で、親会社の監査人の立場から、海外子会社の現地監査人や現地マネジメントを巻き込んでの連結監査を担当しています。

駐在時は、日系企業の現地法人に対する監査業務に従事しておりました。現地法人の従業員の多くが現地の方々ですので、英語を用いてのコミュニケーションが基本となります。

ニューヨークにはネイティブ以外の方も多く、適切なコミュニケーションに当たっては、**文法や発音などの英語力よりも自分が伝えたいことの要点をはっきりと伝えきる「伝達力」が重要**であ

ることを実感しました。

海外駐在の経験を自身の強みに据える

曽木　キャリアを積み重ねる中で、特に重視されてきたことはありますか。

宮上　海外駐在から帰国後は、自分の強みを把握し伸ばすことを特に意識するようになりました。

監査法人という環境下では、会計・監査の知識やスキルは、全ての公認会計士が一定のレベルで有しています。そのような中で、海外駐在という貴重な経験が得られたことから、**グローバルな対応ができることを強みに据え、自身の成長が見込める業務に積極的に手を挙げてチャレンジ**するなど、差別化できる能力を伸ばすべく日々努力を続けております。

キャリアアップの先に広がる新たな世界

マネジャーとして感じた自由と責任

曽木　宮上さんはマネジャーに就任されて4年目となりますが、スタッフやシニアの頃と比較してどのような変化がありましたか。

宮上　裁量が大きくなった分、自由度と責任が増えた印象があります。

シニア・スタッフのころは、上司からの指示に従って業務に従事していましたが、マネジャー就任後は、目標へ向けたマイルストーンを自分で設定できるようになりました。

目標を確実に達成しなくてはいけないという責任やプレッシャーはありますが、複数抱えている業務の優先順位を自分で考え、判断できるという意味では、非常に働きやすくなりました。

曽木　業務の内容や、被監査会社との関係で変化はありましたか。

宮上　業務においては、よりタイムリーな対応が求められるようになりました。スタッフから相談を受けた際は、初めて聞く内容を瞬時に把握し、速やかに的確な指示を出すことを意識しています。

被監査会社との関係については、これまでよりもより上位の職位の方とお会いする機会が増えるとともに、その場で一定の回答が求められる相談を多くいただくようになりました。

マネジャーに就任し監査の奥深さを実感

曽木　マネジャーとして業務を行う中で、新たな気付きを得たこと、見えてきたことはありますか。

宮上　シニア以前は現場レベルの視点で業務に従事しており、監査業務の全体像を把握できていない部分もあったように思います。

マネジャー就任後は、企業の上位者とのコミュニケーションを通じて、企業が会計監査人に対して何を期待しているのか理解できるようになり、

監査業務における視野が広がったように思います。これまで以上に監査業務の意義や重要性を理解でき、監査業務の奥深さを実感しています。

監査チーム全体のレベルアップを意識する

曽木　マネジャーとして、日頃から意識していることについて教えてください。

宮上　人材育成を以前より強く意識するようになり、監査チーム全体のレベルアップのため、個々人の知識やスキルの底上げを行うことを重視するようになりました。お互いに業務の引継ぎはできているか、個々人の業務の理解度に応じたサポートをしながら、チームとしての質を高めることに努めています。

より積極的なコミュニケーションを心がける

曽木　監査業務に対する一人ひとりの理解度について、どのように把握しておられますか。

宮上　業務の重要なフィードバックやコメントなどは、メールではなく電話やオンラインツールを活用し口頭で伝え、対話を通して理解度を確認するよう努めています。

コロナ禍の影響で昨今はリモートでの業務が増え、チーム内で気軽なコミュニケーションをとりづらい状況にあります。そのため、以前よりも自ら積極的に情報を発信し、チームメンバーとのコミュニケーションを頻繁にとるよう心がけています。

職位によって見える世界は変わる

曽木　監査法人ではスタッフやシニアで退職される方は少なくありませんが、監査法人でより高い職位に就くメリットについてどのようにお考えですか。

宮上　監査法人では、職位が上がるほど面白い世界が広がっており、その世界を知らないまま退職してしまうのは非常にもったいないと感じます。

転職するとしても、マネジメント的な視点を知ってからの方がよりよいキャリアを描くことができると思いますし、逆にマネジャーとなって新しい世界を知ることで、監査法人でさらなるキャリアアップを目指したいと考えるようになるのではないでしょうか。

グローバルに活躍する公認会計士を目指す

留学で異文化交流の楽しさを知る

曽木　監査法人の入所時に国際部門へ配属されたとのことですが、もともと国際業務に興味をお持ちだったのでしょうか。

宮上　公認会計士試験に合格後、大学４年生の時に１か月間ロサンゼルスへ語学留学したときの経験が大きかったと思います。多様な国の方々とコミュニケーションすることがとても楽しく学びが多かったことから、文化や考え方の違いを学びながら仕事がしたいという思いが芽生え、入所時から国際部門を志望しました。

国際業務ならではの苦労と面白さ

曽木　国際業務では、国内の業務と違った苦労があるかと思います。その点についてはいかがですか。

宮上　文化や慣習、言語の違いについてはいまだに苦労しています。日本ではスムーズに通じる話であっても、お互いの考えや常識が異なることで話がかみ合わないこともしばしばあります。**相手のバックグラウンドを理解して行動することに大変さを感じることはありますが、同時に気付きや学びも多く、面白さを感じる**ところでもあります。

徹底的な効率化を図る新しい働き方

曽木　海外駐在から帰任後、駐在中のご経験をどのように活かしてこられましたか。

宮上　日本への帰任後は、働き方改革が国の方針として社会に浸透していた時期でもあり、効率的かつ効果的な業務の進め方について議論する上で、アメリカでの業務スタイルは非常に参考になりました。**仕事の質を維持しながら休日を確保するために、徹底した効率化を図るアメリカの働き方は今の業務に活かされています。**

グローバル企業特有の課題に寄り添う

曽木　今後のキャリア展望について教えてください。

宮上　デジタル技術の進化により距離的な問題が解消されつつある一方で、文化や慣習の違いによるビジネス上の課題は依然として存在しています。このような課題の解決に向けて、今後も、**海外駐在で得た経験や人脈、知見を活かしながら、グローバルに展開する企業のサポートを続けていきたい**と考えています。

不確実な時代に求められる存在として

今後さらに重要性を増す監査業務

曽木　監査業務に対して、決められた業務の繰り返しで面白みに欠けるという印象をお持ちの方もいらっしゃるとお聞きしますが、監査業務の社会的な意義や魅力についてどのようにお考えですか。

宮上　今の時代は膨大な情報で溢れ、フェイク

ニュースなども混在する中で、必要かつ正しい情報を見きわめることは難しくなってきています。不確実な時代だからこそ、情報に信頼を付与する監査業務は、社会にとってより一層重要な存在になっていくと考えています。

また、監査は決して繰り返しの業務ばかりではありません。**被監査会社の変化を通じて監査は変化し続けますし、日々変化する社会やビジネスの最先端に関与でき、自らも成長し続けられる点が魅力**であり、そのことをより多くの方々に知っていただくことが重要であると思います。

悩みながらも進み続けて今がある

曽木　昨今では、社会全体で働き方が多様化し、上の職位をあえて目指さない働き方をする方も増えてきています。宮上さんは監査法人へ入所された当初から、マネジャーを目指そうという考えをお持ちだったのでしょうか。

宮上　正直に申しますと、入所した頃は特に目標もなく、シニア海外派遣プログラムの存在を知ったときも、ハードルが高いのではと躊躇しておりました。

しかし当時、監査チームの現場責任者という自分にとって身近な方がニューヨークへ赴任されたことで、自分もチャレンジしたいという気持ちが芽生えました。

その後も、海外駐在の後にどのようなキャリアを描くのか、一般企業へ転職するのか、マネジャーという立場を知らずに辞めていいのかなど、悩み迷いながらもキャリアを歩んできました。そして、マネジャーに就任し新たな世界が目の前に開けた今、これまでのさまざまな積み重ねがあったからこそ現在の自分があると実感しています。

DXで変化し続ける社会の期待に応える

曽木　ウィズコロナ・アフターコロナ時代を迎え、DXがさらに進展する中、公認会計士に対する社会の期待にも変化が出てきていると思われます。新しい時代を迎えるに当たり、公認会計士がさらに存在感を社会に示していくために何が必要であるとお考えですか。

宮上　DXが進む今は、公認会計士が社会に対して存在価値を示すチャンスであり、変化するべきタイミングであるとプラスにとらえています。

従来の監査は必ずしも、社会の期待に全て応えきれておらず、期待ギャップが存在していました。この点、監査手続のDXによってテクノロジーがより力を発揮することで、埋めることができる部分もあると考えており、企業のDXと相俟って、社会に監査の存在感を示せるのではないでしょうか。

社会の動きを注視しスキルを磨く

曽木　マネジャーとして、スタッフやシニアの方々に身に付けていただきたい能力や知識はどのようなものですか。

宮上　まずは私も含め、デジタル分野の能力を高めていく必要があると思っています。加えて近年では、企業の非財務情報開示への関心が高まっており、ESGやSDGs関係の社会の動きをしっかりと注視していく必要があります。

法人の研修なども活用しながら自己研鑽に努め、新しい情報をしっかりと自分のものにしていただきたいです。

読者へのメッセージ

社会の最先端に挑める人材を期待

曽木　若手の公認会計士や、公認会計士を目指す学生さんへメッセージをお願いします。

宮上　公認会計士が担う監査業務は、不確実性が高まる社会や企業活動と密接に連動しており、こうした時代の変化に挑み、楽しむことができる人材が今まで以上に求められています。

今後、公認会計士に対する社会からの期待に応えていくためにも、社会情勢の最先端にかかわり、業界をリードしたいという気概を持った方々が増えていくことを期待しています。また、国際業務の経験はご自身のキャリアの大きな武器となりますので、国際業務にも積極的にチャレンジをしていただければと思います。

INTERVIEW 6

飽くことのない監査業務への探求心

有限責任監査法人トーマツ
シニアマネジャー
滝 雅弘（たき まさひろ）

INTERVIEWER
機関誌編集委員会委員
神林 克明（かんばやし かつとし）

監査業務での経験をベースにキャリアを描く

簿記の面白さに目覚める

神林　公認会計士を目指したきっかけを教えてください。

滝　学生時代、私は働きたいと思う業種や企業のイメージが何となく持てず、将来のキャリアが漠然としていました。

そこで、将来のキャリアに活かすために資格を取得しようと思い、「簿記」の勉強を始めたところ、その面白さに目覚め、簿記に関連する職業として公認会計士に興味を持つようになりました。

公認会計士は、独占業務である監査業務を通じて、さまざまな業種や規模の企業をみることができます。また、監査業務以外にも幅広い活躍フィールドがあることに魅力を感じました。高難易度の資格であることも、公認会計士を目指すことの後押しにつながりました。

数字で経済活動を表す簿記の仕組みに感動

神林　学生の中には簿記がつまらないと感じる方もいますが、滝さんは簿記の勉強を始める際にどのような感想を持ちましたか。

滝　もともと数字を使うことが好きでしたので、簿記に対する抵抗感や苦手意識はありませんでした。むしろ、企業の複雑な経済活動の実態を整理し数値化するという簿記の仕組みが面白いと感じていました。

簿記の問題を解くためには単純な計算力だけではなく、取引内容を解釈した上で数値に落とし込むスキルも求められます。そのことが自分にとってはとても新鮮であり、会計に関する事象に数学的な要素が含まれている点について、興味深く感じたことから、楽しく簿記の勉強ができたと思います。

IPO業務に強い興味を持つ

神林　これまで従事されてきた業務内容について教えてください。

滝　監査法人に入社する前からIPO業務に興味がありました。また、将来的には、漠然とではありますがアドバイザリー業務、特にFA(ファ

イナンシャル・アドバイザリー)業務に携わりたいと考えていたことから、入社の際にIPO業務を中心とする部署への配属を希望しました。

この希望どおりの配属となり、IPO業務はもちろん、上場会社の監査業務、アドバイザリー業務といった業務に関与しましたが、業務に従事する中でIPO業務や監査業務へ強いやりがいを感じました。そのため、現在も、IPO業務と上場企業の監査業務を中心に従事しています。

また、後進の育成にも強い興味があり、そのための取組みも進めています。具体的には、法人内の研修や所属するユニットの人材育成を担当するほか、東京実務補習所運営委員会の副委員長にも就任し、実務補習所の運営の検討やゼミナール等も担当しています。さらに法人内のリクルート活動やDE&I推進を検討するプロジェクトなどにも参画しています。

監査業務がキャリアのベースとなる

神林　ご自身のキャリアを形成する際に大事にしている考え方などがあれば教えてください。

滝　公認会計士には幅広いキャリアの選択肢があることから、まずは監査法人でキャリアをスタートし、監査業務を通して公認会計士としての基礎力を身に付けた上で、自分のキャリアの方向性を定めていきたいと考えていました。

監査法人では、監査業務以外にも、アドバイザリー業務をはじめ監査業務以外の多様な経験を積むこともできるので、キャリアの幅や可能性がさらに広がるだろうという考えもありました。

ただ、公認会計士としてどのようなキャリアを選択するにせよ、監査業務がそのベースとなっていると感じています。

監査業務とIPO業務を軸に活躍の幅を広げる

業務における判断の軸が確立される

神林　シニアマネジャーになられて、スタッフやシニアスタッフのころと比較してどのような変化がありましたか。

滝　職位が上がると、監査チーム内でのポジションも主査といった管理者という立場になることが多くなります。主査は、チームメンバーや被監査会社からさまざまな質問や相談を受け、また、会計・監査上の論点にも適切に対応することが求められます。都度、対応方針を判断していくことになりますが、職位が上がると自分で判断できる領域が増えているように感じます。業務上のさまざまな判断を積み重ねる中で、スタッフやシニアスタッフのころは不明確だった判断の軸が確固たるものとなりつつあると感じています。

また、被監査会社からの質問に対する回答をあえてチームメンバーに任せ自主的な判断や行動を促すなど、後進育成を視野に入れながら業務に取り組むようになったことも変化の1つです。

職位が上がると見える世界が変わる

神林　シニアマネジャーとして業務を行う中で、新たな気付きを得たこと、見えてきたことがあれば教えてください。

滝　スタッフのころも自分なりに最善を尽くして業務に従事し、3、4年ほどで監査の全体像が見えたような気になっていました。

ところが、シニアスタッフになると監査の現場責任者を任されるようになり、さらにマネジャーになると上場企業の主査を任されるなど、**職位が上がるごとに業務の内容や見える世界が変化し、それと同時に監査の全体像を理解する域に到達していない自分に気付かされました。**例えるならば、日本全国を回り制覇したと思ったら、海外、そして宇宙と、挑戦する領域が広がっていくような感覚でしょうか。

監査のまだ見ぬ世界・未知なる領域を見てみたいという探求心は日ごとに強くなっています。

より働きやすい環境が整備される

神林　コロナ禍の影響で監査業務はどのように変化しましたか。

滝　これまでは対面が前提だった監査チームや被監査会社とのミーティングをリモートで行うようになったことで日程調整がしやすくなり、また、通常の監査業務もリモートで問題なく行えることが実証されつつあるなど、監査の業界において新たな働き方を考えるためのよいきっかけになったのではないかと思います。

私自身もリモートワークに切り替わった当初は、仕事とプライベートをコントロールしづらい時期もありましたが、最近では、子どもが帰宅するまでに仕事を終わらせるよう努めることで業務の効率が高まり、家族と過ごす時間を増やすことができています。

期待どおりの充実感が待っていた

神林　公認会計士を目指していたころと現在で、公認会計士に対するイメージに変化はありましたか。

滝　監査業務に興味を持った最大のきっかけが、監査業務を通じてさまざまな企業をみることができるという点だったので業務内容に対するイメージのギャップはほとんどありません。特に、IPO業務では、新たな事業や被監査会社の成長を目の当たりにすることもできており、期待していた通りの充実感を覚えています。初めて、担当したIPO準備会社が上場を達成し、その瞬間を見届けることができたことは、今でもかけがえのない経験になっています。

公認会計士試験合格がスタートライン

神林　スタッフやシニアスタッフのころに苦労したことを教えてください。

滝　入社当時は、公認会計士試験の受験勉強を通して会計・監査に関する広範な知識を得たことに漠然とした自信を持っていました。

しかし、いざ実務の現場に出ると、**経験不足からそれらの知識をうまく活かすことができず、自己研鑽の必要性を痛感**しました。

公認会計士の土台となる会計・監査の知識は非常に重要ですが、入社1年目の私と比べ、資格の有無にかかわらず、実務を長く経験されている被監査会社の担当者のほうが、広範な会計知識と高度な経理処理能力を有していることに驚き、**ここからが本当のスタートだと実感し、決意を新たにした**ことを覚えています。

聞く力、書く力、考える力の重要性

神林　ご自身の経験を踏まえて、スタッフやシニアスタッフに身につけてほしい能力はありますか。

滝　監査業務やIPO業務には被監査会社の現状や課題などを、資料の閲覧やヒアリングを通して把握し、ポイントを押さえ、わかりやすく文章化する力が求められます。是非、これらの力を意識して習得していただきたいと思います。

また、読み解く力、聞く力、書く力といったことを高めるためには、考えることが必要不可欠です。**指示されたことに取り組むだけでなく、その手続をなぜ行うのか、効果的・効率的に業務を進めるために何が必要なのかを常に考えながら監査業務に従事してほしい**と思っています。

監査業務の実体験を伝えることを心がける

神林　後進育成に取り組む上で心がけていることを教えてください。

滝　とにかくさまざまな事例に触れることが重要であると感じていますので、若手の方々がまだ体験していない実務の経験を具体的な事例を用いながら伝えるようにしています。

多くの事例に触れることにより、若手の方々が監査現場で新たな気付きを得ることにつながると考えています。

監査法人でパートナーを目指す

神林　今後のキャリア展望についてお聞かせください。

滝　実は、公認会計士を目指していた時から、公認会計士のみに認められている監査報告書にサインをすることを、キャリアの中での1つ

の目標としていました。そのため、監査法人のパートナーに昇格し、監査報告書にサインすることを目標の1つとしています。

また、今後は海外駐在を経験し、グローバルな視野を身に付けたいという思いもあります。監査業務とIPO業務という2本の柱に、グローバルの経験を付加し、活躍のフィールドをさらに広げていきたいと考えています。

監査には高い社会的意義がある

権限・裁量・責任の大きさを実感

神林　監査業務に対して「単純作業が多い」、「忙しい」という印象を持っている方もいらっしゃると思いますが、監査業務の魅力や社会的意義についてどのようにお考えですか。

滝　たしかに若手のころはさまざまな手続をこなさなければならない時期もありますが、**一見、無意味に感じる手続も、全て意味があって行われているので、是非、その意味も考えながら取り組んでもらいたい**と思いますし、そういった意識をもって臨むと、ご自身のさらなる成長にもつながると思います。そうして職位が上がると、権限や裁量の幅が広がり、業務の内容も変わっていきます。**もし、今が苦しい時期であったとしても、それを乗り越える価値は十分あると思いますので、是非、監査法人で上を目指して頑張ってほしい**と思います。

また、監査業務は資本市場を支える重要なものであり、社会からも大きな期待が寄せられています。何のために監査をしているのか分からなくなってしまうタイミングがあるかもしれませんが、社会からの大きな期待を寄せられる重要な業務に従事していることを再認識し、胸を張って監査業務に従事してほしいと思います。

社会の流れを踏まえた柔軟な対応が必要

神林　コロナ禍を契機にDXが進展する中、監査業務にも変化が出てきています。新しい時代を迎える中でどのような対応が必要となるか考えをお聞かせください。

滝　コロナ禍を契機としたDXの進展によって、監査報告書の押印省略や電子署名をはじめとする電子化の検討など、監査業務も変化しつつあります。帳簿に計上されている内容や数値が請求書や領収書のような外部証憑と一致しているかといった比較的単純な確認作業については、紙ベースでの業務をデジタル化することでAIの活用を推進するとともに、業務集約拠点を活用するといった取組みも行っています。また、AIを活用したデジタルツールは会計監査の現場ではすでに使われています。

最終的な判断の部分はしっかりと公認会計士が担いつつ、業務の効率化やDX化の観点から必要となる仕組みを導入する等、社会の流れに取り残されないように対応していく必要があると考えています。

読者へのメッセージ

監査をキャリアの軸に据えて欲しい

神林　公認会計士試験合格者や若手の公認会計士へ向けてエールをお願いします。

滝　監査業務を通じてさまざまな企業をみることができる点、被監査会社とのコミュニケーションを通じて良好な関係性を築けることは大きなやりがいにつながります。

また、監査で関与した企業のベストプラクティ

スや改善点などが知識・経験値として自分の中に蓄積されていきますので、**監査業務は公認会計士として自己研鑽を行う上でも貴重な場でもある**と考えています。

監査以外のキャリアを検討されている方もいらっしゃるかもしれませんが、**是非、キャリアの軸に監査を据えていただきたい**と思います。

また、是非、監査法人というフィールドでさまざまな経験を積み、上の職位を目指していただき、これまでに見たことのない新たな世界を感じていただきたいと思います。

監査法人に勤務する公認会計士の皆さんに期待すること

日本CFO 協会　主任研究委員、カルビー株式会社監査役　石田（いしだ） 正（ただし）

私は52歳の時、それまで勤務していた監査法人から事業会社（日本マクドナルド）に移りました。今で言う組織内会計士のはしりと言ってよいかもしれません。事業会社に移ってわかったたことは、どちらも同じ数字を扱うのですが、見える景色が大きく違うことでした。具体的に言うと会計監査人の対象となる財務数値はクライアントが作った過去の数値であるのに対し、事業会社で扱う数字は過去だけでなく、現在及び将来の数値であることです。考えてみれば至極当たり前ですが、やはり見ると聞くとでは大きな違いです。

事業会社に移ってはじめての取締役会で、財経本部長（CFO）として四半期の予算と実績の差異分析を報告していました。開始から10分くらいして辺りを見回すと、多くの取締役は居眠りをしているのです。（こんな重要な報告をしているのに、舐めているのか！）とムッとなったのですが、後で経理部長に聞いたら、「石田さん、彼らは過去の数字にはあまり興味がありません。あるのは予算に対して現在の立ち位置と、今期の見通しがどうなのか？　予算が未達であればそれを達成するにはどう言った手を打つべきなのかに興味があるのです」と言われました。彼らにとって与実分析は心地よい睡眠導入剤だったのです。この時、私が25年間、追いかけていたのは「過去の取引数値であり、取引全体の一部に過ぎない」と言う当たり前の事実を再確認しました。財務数値を有効に使う経営のプロは横軸に過去・現在・将来という時系列をおき、縦軸に予算と現在値（見通し）をおいて、事業活動を立体的に把握し、経営判断の材料に使っているのです。こう言ったアプローチは会計監査にも必ず役立ちます。

われわれは一度、監査の原点に戻ってみることが必要ではないでしょうか。

「監査＝Audit」です。Audit の語源はオーディオ（Audio）、即ち「聴く」からきています。事業の現場に出向き、クライアントの人たちと話す時間をもっと持ちましょう。パソコンでワークシートを作り、分析するだけでは問題点の深堀はできません。工場の仕入担当者が予算未達のため仕入先と口裏を合わせ、架空在庫を計上し、粉飾をしているケースがあります。会計監査人は一定金額を重要性の基準にしているため、このような少額の粉飾は異常性のチェックから漏れてしまいます。一方、担当者本人は違法なことをしている意識がないので、毎期同じ過ちを繰り返すことになります。問題はこのようなことが積み重なって、全社ベースでのっぴきならない状況になって初めて表に出てくるのです。そうなってからでは遅いのです。

上下、左右色々な観点で見聞きしていると、思わぬところからヒントが見つかります。先ほどのケースでいえば、個々には小さな取引でも、工場全体の問題かもしれませんし、グループ全体の工場に広がっているかもしれません。リスクの芽は小さいうちにつぶしておく必要があります。ことが大きくなってからでは後始末が大変です。

会計士という職業専門家の間口を自ら狭くしていませんか。

最近でこそ、組織内会計士の数がふえ、事業会社で活躍している会計士が増加していますが、欧米に比べるとまだまだ少数です。バブル崩壊後の「失われた３０年間」に日本企業は必死になって事業の国際化を進めてきました。一方、いまだに遅れているのが間接部門の生産性の低さです。

経理・財務部門とCFOは今まで以上に間接部門の生産性改善と、トップマネジメントの戦略的意思決定のための重要な役割を果たさなければなりません。

公認会計士の職域は皆さんが考えているよりもっと広く、かつ深いのです。我々は会計監査業務を通して企業に関与するだけではなく、職業専門家としての知識と経験を深め、事業会社の人間では気が付かなかった事業リスクを見つけ出し、問題提起が出来るようになっていただきたいのです。そのことが、結果的に企業と監査法人の信頼関係を強め、業務の活性化に役立つのだと確信しています。

INTERVIEW 7

監査法人のパートナーとして監査業務が提供できる付加価値向上を目指す

PwCあらた有限責任監査法人
パートナー
宍戸（ししど） 賢市（けんいち）

INTERVIEWER
機関誌編集委員会委員
池田（いけだ） 大洋（たかひろ）

キャリアアップする中で監査業務の奥深さを知る

想いを遂げるために公認会計士を目指す

池田　公認会計士を目指すことを決めた理由を教えてください。

宍戸　高校生のころから、一般企業に勤めるのではなく自分の力で何かを成し遂げたいという想いがあり、さまざまな専門職を検討した中で、公認会計士が最も自分に適していると考え目指すこととしました。

東京ではなく東北地方の地元の大学へ進学したのですが、当時は、近くに公認会計士試験の受験予備校の校舎がなく、予備校の通信教育を活用し大学での勉強と並行して試験勉強をしました。公認会計士を目指すことに迷いが生じた時期もありましたが、決めたからには結果を出そうという思いで突き進み、合格を果たすことができました。

多様な部署・地域でキャリアを積む

池田　現在所属する監査法人で従事してきた業務内容について教えてください。

宍戸　監査法人入社後は、主にテクノロジー・エンターテインメント系の企業の監査業務に従事してきました。その一方で、国際業務やアメリカのミネアポリスへの駐在、システム監査を含めたIT及び内部統制のサービスを提供する部門、同じメンバーファームの他の監査法人への出向などさまざまな業務を経験してきました。現在は、監査部門に所属し、エンターテインメント・メディア業界のリーダーを務めています。

監査業務の奥深さと社会的意義を知り、パートナーを目指す

池田　キャリアの形成において、特に重視されてきたことはありますか。

宍戸　もともと他者から相談を受けて改善点を提案することが好きでしたので、監査業務は自分に向いている仕事だと思っていました。

その一方で、キャリアの当初から将来へ向けて明確な目標があったわけではありません。**監査業務でさまざまな経験を積む中で監査業務の奥**

深さや社会的意義を知り、マネージャー時代に「今後も監査業務に携わりたい」という想いが明確になり、そこからパートナーを目指すことを決めました。

興味のあることに集中して取り組む

池田　監査法人のパートナーとして忙しい日々を過ごされているかと思いますが、余暇はどのようなことをされていますか。

宍戸　ゴルフが好きということもあり、アメリカのミネアポリスに駐在していたころは、よくゴルフを楽しんでいましたが、今はコロナ禍のため控えています。

　その代わりに、自宅でできる趣味として革を使って財布やカードケースなどの小物を作るレザークラフトに熱中しています。公認会計士試験に向けた勉強をしていたときもそうですが、私自身、興味のあることに全力で打ち込める性格だと思っています。

パートナーにしか見えない景色がある

自ら結論を出す重責とやりがい

池田　パートナーになられて、シニアやマネージャーのころと比較してどのような変化がありましたか。

宍戸　監査業務において最終的な判断を行うことが一番の変化であると思っています。被監査会社との会議においても、結論を出すという立場で臨む重責はある一方で、大きなやりがいを感じています。

　また、これまでよりも経営者の方々と接する機会がより多くなるため、経営者の方から悩みをおうかがいし、ビジネスパートナーとして一緒に解決策を考えていくことができるところが、パートナーという立場ならではの面白さだと思っています。

プレッシャーをモチベーションに

池田　パートナーとして業務に従事される中で、苦労されていることを教えてください。

宍戸　被監査会社との会議などの場で監査法人としての答えを求められるプレッシャーは毎回感じています。

　会議で協議する内容について、懸念点があれば事前に監査法人内の関係各部署と相談しておくなど、正しい答えを出せるよう準備は怠りませんが、何か間違いがあった場合には全てを負う覚悟を常に持っています。

　こういった**プレッシャーをモチベーションに変えられることが、パートナーに求められる大きな素養**であると思っています。

企業の経営者と対等な立場となれる

池田　多くの監査法人ではスタッフやシニアのタイミングで退所する方も少なくないと思われますが、監査法人でより高い職位に就くことのメリットについてどのようにお考えですか。

宍戸　企業経営にかかわる専門家や業務は多々ありますが、その中でも公認会計士は、監査業務を通じて財務諸表全体へ合理的な保証を与えており、企業の経済活動全般にかかわることができます。

　そして、その公認会計士の中でも、**企業の経営者と対等の立場でお付合いができ、持続的な企業の成長と企業価値の向上をともに目指せる立場にいるのが監査法人のパートナーである**と考えています。また、企業の監査役等と連携し、ガバナンス向上の観点から企業価値向上に貢献することもできます。

　若手の公認会計士の方々には、是非、監査法人のパートナーという職位を目指していただきたいと思っています。

実務を通じてさまざまな知識やスキルを習得

池田　国際業務や海外駐在も経験されていますが、文化や言語の違いによるご苦労はありましたか。

宍戸　現在の監査法人では入社1年目から、外資系企業の日本子会社の監査業務に従事してきました。外資系企業の財務諸表等は全て英語で記載されており、当初はその内容を理解することが難しく、また、本国親会社チームとの英語でのコミュニケーションにも苦労しましたが、いずれも現場で経験を積みながら、体得していきました。

　また、海外駐在時には、アメリカの休日を大切にする文化など良い点があった一方で、業務を進めるに当たって日本の手法を取り入れたいと感じる場面もありました。**単に考えを押し付けるのではなく、お互いをリスペクトしながら、よい部分や改善点は率直に伝え合うことが大切**であると感じました。

監査法人にある可能性とチャンス

池田　公認会計士を目指していたころと現在で、公認会計士に対するイメージに変化はありましたか。

宍戸　公認会計士として仕事を始めてから、公認会計士業務の幅が想像以上に広いことを実感しました。**監査法人では監査以外にアドバイザリー業務も行っており、そこにも可能性やチャンスが無限にある**と思います。公認会計士を目指しておられる方はもちろんのこと、若手の公認会計士の皆様にも、公認会計士には無数のチャンスと無限の未来が広がっていくことを知っていただきたいです。

信頼の付与から信頼の基盤構築へ

池田　今後のキャリア展望についてお聞かせください。

宍戸　昨今、SDGsやESGが注目されるなど、非財務情報の信頼性も求められるようになってきており、公認会計士が保証を付与する分野はさらに増えていくと考えられます。

　従来の財務諸表監査のみではなく、幅広い分野における保証業務の提供も視野に入れ、社会動向を踏まえた新たな信頼の基盤作りに取り組んでいきたいと考えています。

DX時代に対応した新たな監査業務を作り上げる必要がある

社会の進化に応じた監査基準が必要

池田　近年、監査業務は高度化・複雑化し、業務量も増えており、現場には疲弊感が出てきていると思われます。若手や中堅の公認会計士が、引き続き監査に従事していくために何が必要でしょうか。

宍戸　ご指摘のとおり、監査業務において要求される水準は年々上がってきていると感じていますが、それは監査業務に対する社会からの期待の表れであるといえます。

デジタル技術の進化に伴い、監査業務に活用できるツールや仕組みも発展していますので、積極的にそれを学び、活用することが必要だと思います。デジタルツールを柔軟に取り入れていくことで業務量の平準化や監査業務の高度化を実現していけるのではないでしょうか。

また、DXの進展に応じて、当該ツールを利用した監査を許容できる監査基準の見直しも必要であると思っています。

例えば、昨今、我々も含めた大手監査法人ではAIを使ったリスク評価などの手法を取り入れており、成果も上がりつつありますが、現行の監査基準にはAIを使った監査手続に関する直接的な記述はありません。一方で、近年の社会情勢に鑑みても、AIを業務に活用する流れはさらに加速することが想定されます。これは日本だけではなく海外も含めた大きな課題ではありますが、監査業務の質を落とすことなく、DXの進展に合わせてタイムリーかつバランスをとりながら、監査基準の改訂を行っていく必要があると考えています。

AI活用による付加価値の創出

池田　ウィズコロナ・アフターコロナ時代を迎え、DXがさらに進展する中、公認会計士が社会へ存在感を示していくために何が必要だと思われますか。

宍戸　先ほど申し上げた監査業務におけるAIの活用については、非常に大きな可能性を秘めていると感じています。

AIの活用によって監査業務の負担を軽減するだけではなく、一連の業務の中で収集したビッグデータを監査の視点で分析し、そこから得られたさまざまなインサイトを活用することで、公認会計士だからこそ提供できる付加価値を生み出していけるのではないでしょうか。

デジタルネイティブが活躍できる時代

池田　公認会計士を目指す学生や若手の公認会計士に、心がけてほしいことや期待されることはありますか。

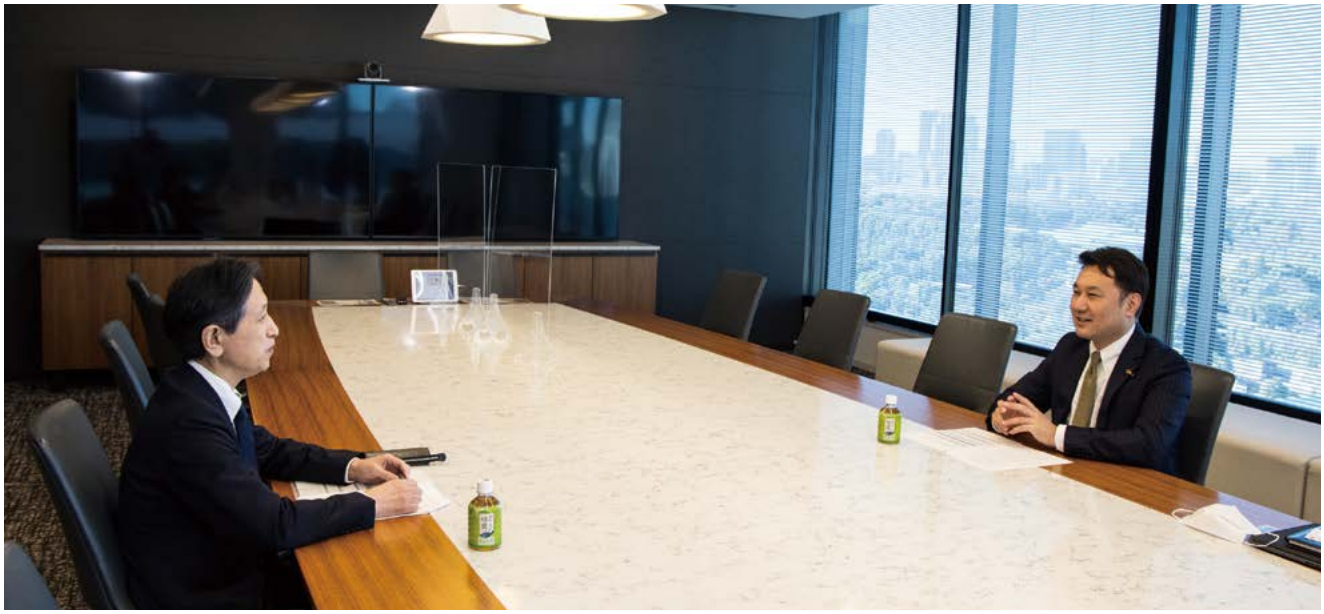
宍戸　若い世代の方々は、子どものころからデジタル技術や多様な価値観と接してきており、私たちの世代と比べてSDGsやESGなどの動向を素早くキャッチアップできていると思います。

その一方で、自ら判断をして物事を決めていくことが苦手な方もおられるように感じています。若い方々には、**ぜひオーナーシップを持ち、何事にも主体的に取り組んでいただきたい**と考えています。

池田　確かにDXの進展により、自ら主体的に考え動くことがより求められてくるようになると感じます。宍戸さんが所属する部門等で、若手の方々に主体的に業務に取り組んでいけるように実践されていることがあれば教えてください。

宍戸　私が現在所属する部門では、デジタルに興味を持ったスタッフが多いこともあり、業務の効率化に役立つツールなどを提案・開発し合う取組みを実践しています。

優れたツールを製作したスタッフを表彰するほか、他の監査チームともツールを共有しており、若手の方々の主体的な活動が業務の効率化・



最適化につながっています。

池田　デジタルネイティブとよばれる世代だからこそ、DXの進展する現代は存在感を示すことのできる環境にあるということでしょうか。

宍戸　そのとおりです。監査業務のDXはまだ道半ばではありますが、**過渡期の今だからこそ、若い方々にとっては新しい時代の監査業務を自ら作り上げていくチャンスがある**のだと思っています。

読者へのメッセージ

公認会計士の可能性は無限にある

池田　シニアやマネージャーとして現場で活躍しておられる公認会計士へエールをお願いします。

宍戸　私は、公認会計士は可能性が無限にある職業だと考えています。「この業務はこうあるべき」という固定観念にとらわれることなく、何事にも柔軟な姿勢で取り組んでいただきたいと思います。

加えて、公認会計士の独占業務である監査という仕事は、経験を積むにつれて業務の幅や見える世界が広がっていく、とてもやりがいのある仕事です。皆様には、是非、監査業務の魅力を知っていただいた上で、将来のキャリアを描いていただきたいと願っております。

資本市場の健全な発展に向け、会計監査や公認会計士へ期待すること

日本監査役協会専務理事　**後藤（ごとう） 敏文（としふみ）**

監査役等にとって、公認会計士または監査法人が務める監査人は、連携の相手方として必要不可欠な存在です。

監査役等と監査人は、それぞれが監査をその職務とし、コーポレート・ガバナンスの一翼を担い、その職務を通じて企業不祥事の発生防止をはじめとした企業活動の健全化を図り、企業の持続的な成長と中長期的な企業価値の向上に貢献しています。

その中で、両者の連携については、様々な法規範等に定めが置かれています。まず、会社法上、監査役等は業務監査権限を有するとともに会計監査権限を有し、会計監査人の監査の方法と結果の相当性を判断する責務を負っています。会社法第397条においては、会計監査人の監査役等に対する報告義務及び監査役等の会計監査人への報告請求権が規定されています。また、金融商品取引法においても、第193条の３に基づく監査人による監査役等への通知義務が規定されています。

さらに近時では、監査上の主要な検討事項（KAM）の導入に際し選定プロセスにおける監査役等との協議が監査基準上明記されたことをはじめ、監査を取り巻く環境が日々刻刻と変化を続ける中でも、両者の連携に対する期待はより一層高まっているものということができるでしょう。

その中で、両者は、こうした各種規範に形式的に従っていくのではなく、年間を通じて適時の情報共有や率直な意見交換を行うことの出来る信頼関係を構築することが重要です。私自身の監査等委員としての経験をお話ししますと、監査等委員に就任するまでに財務・経理部門での経験が全くなかったため、就任当初は非常に不安でした。ですが、当時担当されていた公認会計士の方の説明が大変分かりやすく、会社側の問題を的確に指摘していただいたため、大変助かった経験があります。こうした経験からしますと、公認会計士の方にとっては、財務・会計に対する知見はもちろんですが、コミュニケーション能力もとても重要な資質といえるのではないかと思います。

日本監査役協会では、これまで日本公認会計士協会と共同しての「監査役等と監査人との連携に関する共同研究報告」の取りまとめや、その内容を受けた「会計監査人との連携に関する実務指針」の策定・改定を始めとした取組みを進めてきました。今後も両者の連携のより一層の強化とコーポレート・ガバナンスの向上に向けて尽力していきます。

INTERVIEW 8

海外への挑戦で得た経験がキャリアの武器となる

太陽有限責任監査法人
パートナー
花輪（はなわ） 大資（だいすけ）

INTERVIEWER
機関誌編集委員会委員
加藤（かとう） 真（しん）

自分の力で世の中に役立つ仕事をしたい

独立独歩で活躍できる専門性に憧れる

加藤　公認会計士を目指したきっかけについて教えてください。

花輪　両親が飲食業を営んでおり独立独歩で働いている姿をみていたことから、一般企業で働くのではなく、専門性を活かして自身の力で道を切り拓き活躍できる仕事に就きたいと考えていました。そうした中、中学生のころに予備校が発刊している職業紹介の冊子を読む機会があり、公認会計士が会計や監査の専門知識を武器に活躍でき、世の中の役に立つ仕事に従事できることを知り、自分の志向に合っていると感じたことから興味を持ちました。

公認会計士を目指すため大学の進路は商学部を選択し、大学での授業と並行して公認会計士試験の受験予備校にも通い、公認会計士試験に合格することができました。

国内外で業務を経験

加藤　これまでのキャリア変遷について教えてください。

花輪　監査法人に入所し、東京事務所で7年半にわたって監査業務に従事した後にインドへ5年半出向を経験しました。日本への帰任後は、名古屋事務所に所属しており、現在はパートナーとして監査業務に従事しつつ、本部の国際部や品質管理部の業務も兼務しています。

海外への関心を学生のころから持ち続ける

加藤　インド駐在を経験しておられますが、以前から海外で活躍したいというお考えをお持ちだったのでしょうか。

花輪　中学生のころにオーストラリアへのホームステイを経験するなど、海外に対する関心は以前から持っていました。

また、監査法人入所後も、国内企業の監査業務

に従事していたのですが、チャンスがあれば海外事務所に駐在したいと考えていました。その折、法人内で海外事務所へのスタッフを派遣する動きが活発になり、海外へ挑戦したいという想いが鮮明になりました。

自身の成長のためインドを選択

加藤　インドの事務所への駐在はご自身で希望されたのですか。

花輪　当時、駐在先として香港、シンガポール、インドの３つの候補がありました。

香港やシンガポールは、すでに日本企業が多く進出しており経済的にも発展しており、実務もある程度確立されています。

一方で、インドは日本企業がそれほど進出しておらず将来的に大きな発展が期待されており、一から実務を切り拓いていくという面白い経験ができるのではないかと感じました。こういった環境で業務に従事する方が、自身の成長にもつながると考え、インドを選択しました。

インドで培ったキャリアの土台

日系企業に対するビジネスを展開

加藤　インドで従事してきた業務内容について教えてください。

花輪　ニューデリー近郊の都市であるグルガオンにネットワークファームの事務所があり、私はそこでジャパンデスクを立ち上げ、日系企業に対するビジネスの責任者として営業やサービス提案のほか、現地の監査チームに日系企業への対応をアドバイスするなど指導的な役割を担っていました。

インドの日系企業は、小規模で人員も限られており、製造などに携わる技術系の方が専門外の会計や税務の業務を兼任していることが多く、公認会計士に対するニーズは非常に高いと感じました。

監査の概念は世界と共有できる

加藤　インドは日本や欧米とは異なる文化や商慣習があったかと思いますが、そのような環境下で苦労したことを教えてください。

花輪　企業の日本本社とインドの現地法人の間における意思疎通では、日々苦労の連続でした。その経験から、**文化や商慣習の異なる相手とのビジネスでは、お互いの背景を踏まえて歩み寄り、理解し合うことが重要**であると学びました。

一方で、会計・監査実務においては、**会計・監査の専門用語は多くを説明しなくてもそれ単独で理解を共有できます**ので、会計や監査基準が共通言語といわれるゆえんを感じることができました。

インドの独特の考え方について

加藤　インドの文化や考え方で、特に驚かれたことはありますか。

花輪　インドでは、例えば新制度を導入してから様子をみながら制度の骨子を次々に変更することが多々あり、「先のことを考えても意味がない」という考え方が根付いているように感じました。これは、あらゆる場面で不確実性が高いインドの環境が生み出した文化であるともいえます。

そのため、事業計画を現地スタッフにヒアリングしても「来年のことはわからない」という返答がなされることもあり、先を見越して業務を行うということに対してなかなか理解を得られなかったことが印象に残っています。

加藤　そのような状況で業務を進めることには苦労もあったかと思いますが、どのように対応をされたのでしょうか。

花輪　現地法人の対応の遅さに不満を抱く**日本**

の本社に対しては、前もって業務を進めることが難しい文化的背景があることを伝えるとともに、このような文化的背景を踏まえて会計・監査に関連した今後の対応方針を丁寧に説明することを心がけていました。

駐在期間の後半では、周りの方々から「花輪さんはまるでインドの人みたいだね」といわれるほど、インドの文化を深くまで理解し対応できるようになりました。

公認会計士が幅広く活躍できることを実感

加藤　インド駐在で得た経験で大きかったことや、そこから得た学びについて教えてください。

花輪　インドでは監査業務にとどまらず、現地の制度や税務に関する相談に対応するなど、**多岐にわたる業務に従事し、公認会計士が幅広い分野で活躍できる職業であることを実感**しました。

インド駐在時は多くの苦労もありましたが、自分の裁量のもとでさまざまな業務を経験することができました。今となっては自分の根幹を成すような経験をさせていただいた5年半だったと思っています。

インドで培った何事にも動じない心

加藤　インドで得た経験や学びは、現在の業務にどう活かされていますか。

花輪　現在は国内企業の監査業務のほか、インドを拠点にビジネスを展開する企業のサポートも担当しています。現地の特殊な税制を日本と比較しながら説明するなど、両国の違いを理解している自分だからこそできるサポートを行うことを心がけています。

また、業務において何か問題が発生しても動じることなく、いったん受け止めた上で解決策を考えようという思考になったことも、インドの不確実性に鍛えられた経験が活かされていると思っています。

国際業務を含め幅広く活躍したい

加藤　今後はどのようなキャリアを形成していきたいとお考えですか。

花輪　私の存在を特徴付けているものはインドでの経験であり、今後もライフワークとして、インドとはさまざまな形でかかわっていきたいと考えています。

またインドに限らず、海外とのやり取りで課題を抱える企業に対して手を差し伸べられる存在となれるよう努めていくとともに、会計・監査の知識や経験を土台に幅広い分野に取り組んでいきたいと思っています。

手続に終始せず、企業をしっかりとみてほしい

監査法人の経営や人材育成に関与

加藤　パートナーに就任される前後を比較して、変化したことや新たに意識されるようになったことはありますか。

花輪　パートナーとして監査法人の経営にかかわるようになったことが大きな変化であり、スタッフの時代と比較してより主体性を持って仕事に取り組むことができています。

また、名古屋事務所のスタッフの業務をアサインする立場でもあるため、現在は人材育成を最重要課題としてとらえています。的確なアサインができるよう、監査業務の内容や遂行状況に目を配るほか、各スタッフの能力や置かれている状況等もしっかりとフォローし、監査チームに対しても細やかな気配りをするように心がけています。

企業の経営実態の把握に努めることの重要性

加藤　監査業務に対してネガティブな印象を持っている方もいますが、若手の公認会計士の方々へ監査業務に面白さを見出すためのアドバイスをいただけますか。

花輪　監査業務では決められた手続を遂行するだけではなく、業務を通じて企業の抱える悩みや将来的な課題などをピックアップすることが重要だと考えています。

若い世代の方々は、決められた業務を全うするだけではなく、業務を通じて企業の実態や課題を把握するようにしていただくと、業務が面白いと思えるようになり、また、自身の成長にもつながると思います。パートナーやマネジャーが企業全体をどうみているのか、話を聞いてみると、意外な発見があるかもしれません。全体感を掴

んだ上で個別の手続に取り組むのとそうでないのとでは、大きな違いがあるはずです。

加藤　監査手続も大切ですが、その先にみえる企業の実態を把握し、公認会計士の知見を駆使して考え判断していくことが重要ということですね。

花輪　そのとおりです。

　また、監査の視点だけではなく、税務やアドバイザリーの視点からも企業の経営状況をみることにより、自身の視野をさらに広げ、企業経営の観点での知見を身に付けることもできると思います。

海外への挑戦は必ずプラスになる

加藤　若くして監査法人を退職する方もいらっしゃいますが、花輪さんは若いころはどのように監査法人でのキャリアについて考えていましたか。

花輪　実は、私もインドへ赴任する前は閉塞感を抱いていた時期がありました。インチャージを務め、監査現場の業務も一通り経験しましたが、このまま同じことを繰り返してよいのかと悶々とした思いを抱えていました。

　そうした思いを払拭すべく、海外駐在の募集に応募し、インドでの駐在を経験できたことで新たなキャリアを切り拓くことができました。今振り返ると、あのタイミングで海外へ挑戦していなければ監査業界を離れていたかもしれません。

　私が所属する監査法人の被監査会社においても、海外で事業を展開していない企業は少数となってきていることを考慮すると、**海外へ挑戦することは公認会計士のキャリアに間違いなくプラスになる**と思います。

専門家として活躍できる環境整備の必要性

加藤　公認会計士が今後もやりがいを持って監査に従事していくために、何が必要だと思われますか。

花輪　現在の監査業務では、監査マニュアルで実施すべき手続が細かく定められており、決められた手続をこなすことに終始することが多く、やりがいを感じにくい状況にあるのではないかと思っています。

　一方で、インドでは欧米と同様に業務の多くを無資格のスタッフが担っており、専門家の判断が求められる業務に会計士が注力できる環境が整っていました。

　日本においても、公認会計士が専門家としての判断が求められる業務に注力できる環境のより一層の整備が求められるのではないでしょうか。手続自体が目的ではなく、企業を多角的かつ深く理解し、企業実態を正しく反映した財務諸表かどうかの専門的判断が公認会計士に求められていることを常に意識できる環境が重要であると思います。

読者へのメッセージ

新しい世界を感じるために
海外へ果敢にチャレンジしてほしい

加藤　シニアやマネジャーとして監査の現場で活躍する公認会計士の方々へエールをお願いします。

花輪　現在従事している監査業務では、こなさなくてはいけない手続が多く、閉塞感を感じている方もいらっしゃるかもしれませんが、公認会計士の仕事は本来、自由で幅広いものです。**目の前の業務を全うするだけではなく、その先のさまざまな事象に目を向けると想像以上に多様で大きな世界が広がっている**ことを感じていただけるかと思います。

その**新しい世界を体感するため、海外へ積極的に挑戦していただき、公認会計士としてのキャリアの可能性を広げていただきたい**と思います。

グローバルで活躍する公認会計士を目指す人への期待

国際会計士連盟（IFAC）ボードメンバー　**觀（かん） 恒平（こうへい）**

私は2020年11月より国際会計士連盟（IFAC）のボード会議に出席しておりますが、そこで、”Only accountants can save the world”（唯一会計プロフェショナルだけが世界を救うことが出来る）というメッセージが何度か発せられました。正直、そこまで言うのかとも思いましたが、会計プロフェショナルは企業の良きパートナーとして高い倫理観を持ち、そして何よりもグローバルネットワークを備え仕事をするプロフェショナルは他にいない、したがって会計プロフェショナルこそが唯一この難しい世の中の救世主となれるということです。

世界は大きくものすごいスピードで動いています。テクノロジーの進展もそうですが、今回のパンデミックの急速な広がりが示すように、今以上にグローバル化が進み、ますます物事をグローバルで議論し解決する必要があります。所謂、”Think Globally, Act Locally” が求められます。

私がIFACのボード会議に参加してみて感じるのですが、日本の会計プロフェションにとって、国際機関での日本人の存在感をいかに高めるかということが今後のひとつのチャレンジだと思っています。現在、IFACが関連する国際会議体（例えば、国際監査・保証基準審議会（IAASB）/国際会計士倫理基準審議会（IESBA）等）、IFRS財団にある国際会計基準審議会（IASB）、今後、設置が決まっている国際サステナビリティ基準審議会（ISSB）等があります。現在これらの国際機関には、これからメンバー選定を行うISSBを除いて日本からそれぞれ人が派遣されメンバーとなっていますが、メンバーの選定はますます競争が激しくなり必ずしも日本の席が確保されているわけではありません。そういう中で、是非、やる気のある人に挑戦してもらいたいと切に思います。それはご自身の人生にとっても意味ある、十分に値するだけの魅力を有しています。

では、グローバルで働く、海外で暮らすには何が重要なのか？　ここはいろいろな意見があろうかと思いますが、もし事情が許せば海外で生活し仕事をすることをお勧めします。その際、私が大事に思っていることは、「相手の国また人を理解し、そして好きになること」だと思っています。外国人と仕事をしたり、特に現地で暮らしたりする場合、どうしても日本と比較をして物事を考える、また相手をイメージで判断しがちになります。実際イメージ通りというところもありますがそうじゃないところが多くあります。これはどこの国でも、長い時間をかけて作られた生活習慣、文化に根差したもので、ましてやどちらがいいとか悪いとか言えるものでもありません。相手をよく理解しリスペクトすること、そして好きになることが大事で、これはダイバーシティの推進にもつながるもので、また私はそう感じた時から外国人との仕事がスムーズになりまた楽しくなりました。

最後に、会計プロフェションの世界は、今まで欧米がリードしてきた歴史がありますが、その世界に日本から一人でも多くのリーダーが輩出されることを期待します。

INTERVIEW 9

中小監査法人で、さらなるキャリアアップを実現

監査法人 東海会計社
代表社員
片井（かたい） 悠太（ゆうた）

INTERVIEWER
機関誌編集委員会委員
曽木（そぎ） 貴子（たかこ）

積み重ねた経験が未来を拓く

自分の力で活躍できることが魅力

曽木　公認会計士を目指したきっかけを教えてください。

片井　大学在学中、学内で資格の受験予備校の講師を招いて簿記を学ぶ特別講座が開講され、友人と興味本位で受講しました。その講座の講師の方に講座とは別に仕事の内容の話をおうかがいする機会があり、そこで初めて公認会計士という職業を知りました。お話から、一般企業に属するのではなく、専門知識を武器に自分の力で活き活きと活躍されている姿が目に浮かび、そういった働き方ができることに魅力を感じ、公認会計士を目指すことを決意しました。

簿記が公認会計士を目指す原点に

曽木　初学者の方は簿記に苦手意識を持つことも多いと思われますが、学び始めたころの印象はいかがでしたか。

片井　簿記には、学びを深めるほどにその仕組みに対して敬意のような気持ちを抱くようになりました。企業の資金の流れだけではなく企業の活動を借方、貸方で仕訳を切ることによって企業を知ることができるという画期的な仕組みであり、時代が変わっても複式簿記の基本的な考え方は変わりません。

　複式簿記を学んだことは、私が公認会計士として歩みを進める上で原点といっても過言ではありません。

大手監査法人でIPO支援業務の経験を積む

曽木　これまでのキャリアの変遷について教えてください。

片井　公認会計士としての将来のキャリアの選択の幅を増やすため、まずは大きな組織で多様な業務の経験を積みたいと考え、公認会計士試験合格後に大手監査法人に入所しました。

　入所後は、希望をしていたIPO支援業務を担当する部門へ配属されましたが、当時はリーマン・

ショックの影響でIPOの案件が減少し、IPO支援業務の将来性に不安を覚えることもありました。

その後、所内の部門再編等の関係で、公会計関係の部門へ異動し、監査業務の基礎と国や地方公共団体といった大規模な組織のあり方を学びました。非常に良い経験をさせていただいたのですが、入所当初からIPO支援業務に従事したいという気持ちを強く持ち続けており、景気が回復し、IPO市場が活況になってきたころ、所内のジョブポスティング制度を活用し再びIPO支援業務を担当する部門へ異動しました。同部署では、3年間にわたりIPOについて徹底的に勉強と経験をさせていただきました。

その後、**IPO分野の業務をさらに極めたいと考え同法人を退職し、個人事務所の設立を経て、現在は監査法人東海会計社の代表社員としてIPO支援業務に従事**しています。

曽木　大手監査法人でキャリアを積み重ねる中で、特に重視されてきたことはありますか。

片井　IPO支援業務に関連するさまざまな知識や経験をインプットすることを重視し、IPO支援業務に従事できる部門でキャリアを積むことを意識してきました。

大手監査法人で数多くのIPO案件にかかわれたことは、現在の業務を行う上で基盤となっています。

また、**大手監査法人時代の上司や同期のメンバーにはとても優秀な方が多く、仕事やコミュニケーションを通じてとても良い刺激を受けました。**彼らとはなんでも聞くことができる関係を構築することができ、自身のキャリアアップにも繋がりました。大手監査法人時代に培った人脈は個人事務所設立後のキャリアにも役立っています。

ベンチャー企業と一緒に仕事をしたい

曽木　IPO支援業務に興味を持ったきっかけがあれば教えてください。

片井　学生の時代から、ベンチャー企業などの小規模ではありますが活力がある組織で仕事をしたいと強く思っていました。

監査法人の就職面接の面接官の方がIPO支援業務に従事されており、面接の中でIPO支援業務に関するお話を伺い、組織の中と外の違いがありますが、ベンチャー企業とかかわることができる点に惹かれ、IPO支援業務に興味を持ちました。

IPO支援業務で活躍できる場所を求めて

自分を磨けるポジションを探して

曽木　大手監査法人を退所後、さまざまなキャリアの選択肢がある中で中小規模の監査法人を選択した理由を教えてください。

片井　退所後は、設立した個人事務所で上場支援業務や内部監査、内部統制のコンサルティング業務に従事しつつ、監査法人東海会計社で非常勤職員として会計監査のほかIPO支援業務にも従事していました。そして、同法人において、IPO支援業務にインチャージの立場で関与し、上場を果たすことができました。

当時、中小規模の監査法人が監査人の企業がIPOを達成するケースは稀であったことから、証券市場の関係者へのインパクトは大きく、同法人の知名度が高まり、同法人へのIPOの依頼が増加しました。

私は、IPO分野の業務を極めたいという思いから大手監査法人を退所しており、**IPO支援業務に多く従事できる環境に身を置きたいと考えていたことから、これは大きなチャンスだと思い同法人の代表社員に就任**することとしました。

現在、幅広い業種や規模の企業のIPO支援業務に携わることができており、同法人は私にとって理想的な職場であると感じています。

中小監査法人ならではの経験

曽木　大手監査法人を退職し、監査業界を離れる公認会計士が増えていますが、中小監査法人で監査業務を続けることの魅力について教えてください。

片井　中小監査法人では、大手監査法人時代よりも裁量権のあるパートナー自ら被監査会社を往査して**会社と密なコミュニケーションをとる機会が多く、より弾力的な対応ができる**点が魅力として挙げられます。また、パートナー自らが被監査会社を多く往査することにより信頼関係が構築され、**企業の将来像や経営方針等についてより深い話ができる**ことも魅力の１つであると思います。

そして、**さまざまなバックグラウンドを持つスタッフと働くことができる**点も魅力として挙げられると思います。大手監査法人で働く公認会計士の方々には、自分と似たキャリアやバックグランドの方が多かったように思いますが、中小監査法人に勤務する公認会計士は多様なキャリアやバックグランドを有している方々が多いと思います。自分とは異なる経験を経てきた方々と一緒に仕事をする中で多くの刺激を受け成長につながっていると感じています。

情報のインプットの機会を自ら作る

曽木　中小監査法人で苦労されたこと、また、その苦労をどのように乗り越えたのか教えてください。

片井　大手監査法人時代は、会計や監査基準のアップデート情報のほか、さまざまな企業の動向や事例といった情報も監査チームや同期、法人内の研修を通じて入手できる環境下にあったため、インプットできる情報量が圧倒的に多かったように感じます。

一方、中小監査法人では、担当する被監査会社以外の事例や課題など、座学だけでは得られない現場の公認会計士の生の声がなかなか伝わってこないため、インプットできる情報が限られてしまいます。

私の場合は、多くの生きた情報に接するために、大手監査法人時代の知人などのネットワークから様々な業界の最新情報を収集したり、私と同じく大手から中小監査法人に移籍した方が集まるコミュニティで会計や監査の事例を学ぶなど、積極的に情報のインプットの機会を作るようにしています。

IPO支援業務に邁進する

曽木　今後のご自身のキャリア展望について教えてください。

片井　監査法人東海会計社の代表社員として、IPO支援業務に引き続き従事したいと考えています。

皆様ご承知のとおり、企業が上場を果たすと、上場セレモニーで鐘を鳴らすのですが、企業の経営者のみならず我々IPO支援業務を行ってきた公認会計士にとってもこれまでの苦労が報われ、大きな喜びを感じる瞬間であると言えます。

多くの企業の上場セレモニーの鐘を鳴らす場に立ち会えるように今後もIPO業務に邁進していきます。

目前の仕事は将来の財産になる

監査業務はキャリアの糧になる

曽木　監査業務に対して、忙しく定型的な業務だという印象をお持ちの方もいらっしゃいますが、これまでの経験から、監査業務の魅力はどのような点にあると思われますか。

片井　公認会計士としてキャリアアップするために必要となる知識や経験を得られることが、監査業務の魅力であると感じています。

中小監査法人の魅力は、間接業務が少なく、被監査会社と接する機会を多く持つことができ、企業の生きた情報をよりたくさん得られることにあります。

一方で、大手監査法人では、多種多様な企業の監査に従事することができ、多くの企業のベストプラクティスを知り、最新の会計・監査の情報に容易にアクセスができ、キャッチアップすることができます。

中小監査法人、大手監査法人どちらの経験もご自身のキャリアに大いに活かすことができるはずです。いずれにせよ、**スタッフやシニア時代の業務は、将来のキャリアにおいて決して無駄にはなりませんので、将来を見据えつつ業務に従事していただきたい**と思います。

将来のキャリアに重要なインプットの期間

曽木　監査業務は高度化・複雑化し業務量も増えています。若手の公認会計士が今後もやりがいを持って監査に従事していくために、心がけてほしいことはありますか。

片井　監査法人は、多種多様な企業の監査に従事でき、幅広い知識や経験、高い能力を持つ上司や同僚などにも恵まれた環境であり、公認会計士としてのキャリアの幅を広げてくれる場所だと思います。

すぐに結果を出すことは難しいかもしれませんが、**地道に業務に励んでいれば収穫を得られるときがかならず訪れます。**若手の方々には、**今は将来に向けたインプットの期間であるとポジティブにとらえて目前の仕事に取り組んでいただきたい**と思います。

企業や組織のよき伴走者として

曽木　今後も、公認会計士が存在感を社会に示していくために必要なことは何だとお考えですか。

片井　公認会計士は合理的な判断ができる思考、論理的に物事を説明する能力を持ち合わせていることが特徴だと思います。そのような知識やスキルを活用し、監査業務だけでなく、企業からのさまざまな相談や課題に積極的に応え、企業の経営者のよき伴走者となることが私たちの存在感を示していく上で重要になると考えます。

読者へのメッセージ

日本の未来を切り拓いてほしい

曽木　インチャージやマネージャーとして現場で活躍している公認会計士の方々へエールをお願いします。

片井　私が監査法人に入所した当時は、財務報告に係る内部統制報告制度（J-SOX）の適用初年度であり、J-SOXの実務経験を持つ公認会計士がいないという状況でした。そのとき先輩に言われたのは、「スタートラインは皆一緒、先輩も後輩も関係ない」という一言で、この言葉は今でも胸に残っています。

コロナ禍とともに大転換期を迎えている現在の状況もこのときと同じであり、新しい世界を生き抜いていくために皆等しくスタートラインに立っているといえます。

若手の皆様には、このような大転換期においても臆することなく、各々の置かれた環境下において最良の監査スタイルを模索し、自らが日本経済を牽引し日本の将来を切り拓いていくのだという気概をもって業務に励んでいただきたいと思います。

INTERVIEW 10

監査法人には自分で考え、活躍できる場がある

双研日栄監査法人
代表社員
箕輪（みのわ） 光紘（みつひろ）

INTERVIEWER
機関誌編集委員会委員
松田（まつだ） 由貴（ゆき）

法人内でキャリアを重ね代表社員へ

経済をリードする姿に憧れを抱く

松田　公認会計士を目指そうと思われたきっかけを教えてください。

箕輪　高校生のころに、書店で偶然手に取った資格紹介の雑誌で、経済をリードする存在として公認会計士が紹介されており、憧れを抱いたことが公認会計士を目指すきっかけとなりました。

公認会計士になることを視野に入れ、高校生のころから簿記の勉強を始めました。大学では経済学を専攻しつつ、公認会計士試験の受験予備校にも通い、公認会計士を目指して勉強に励みました。

業務に邁進し道を切り拓く

松田　キャリアの形成において、重視されてきたことがあれば教えてください。

箕輪　監査法人に入所したころは、法人の代表社員を目指すといった将来ビジョンを明確に思い描いてはいませんでした。

しかし、法人でさまざまな業務に従事し、会計や監査に係る実務を経験していく中で、日々成長していくことができ、気付いたら代表社員に就任していました。

日々の業務に邁進し経験を積み重ねてきた結果として、今の立場があると考えています。若いころに将来ビジョンを描けていなかったとしても、目の前の業務にしっかりと取り組むことで道は自ずと拓けていくのだと感じています。

コロナ禍が働き方を考えるきっかけに

松田　代表社員というお忙しい立場の中で、余暇はどのように過ごされていますか。

箕輪　休日は、子どもの習い事に付き添ったりピクニックへ出かけたりと、家族と過ごすことが多いです。以前は立場上、仕事を優先せざるを得ないときもありましたが、コロナ禍の今は在宅勤務が増えたこともあり、家族と過ごす時

間をより大切にできるようになりました。テレワークが当たり前になりつつある社会の中で、今後は働き方に対する考え方を変えていく必要があると感じています。

中小監査法人には魅力が多くある

大きな裁量の与えられる職場で働きたかった

松田　箕輪さんは、公認会計士試験合格後に現在所属している監査法人へ入所されています。試験合格後は大手監査法人に入所される方が多いと思いますが、中小監査法人で働くことを選択した理由を教えてください。

箕輪　もともと、公認会計士試験の受験勉強をしていたころから、大きな組織に所属して働くのではなく、**個人に大きな裁量が与えられている職場で働きたいという思いを強く持っていました。**大手監査法人よりも中小監査法人の職場環境の方がこの思いに合致していたことが決め手であったと思います。

　また、入所を決める前に事務所を見学する機会をいただいた際に、**アットホームな雰囲気を感じられたことも理由**として挙げられると思います。

代表社員として多岐にわたる業務にチャレンジ

松田　代表社員に就任後、どのような業務に従事されているのでしょうか。

箕輪　業務執行責任者として監査報告書にサインをするほか、インチャージやスタッフとして現場の業務にも従事しています。つまり、代表社員という職位ではありますが、監査業務全般に携わっているといえると思います。

　また、監査業務のほかIPO支援業務や法人の人材採用等も担当しており、代表社員就任後も様々な業務を経験させていただいております。

若手とも近い距離感で仕事ができる環境

松田　アットホームな雰囲気の職場というお話もありましたが、代表社員に就任された後にスタッフとの距離感に変化はあったのでしょうか。

箕輪　代表社員就任後も、監査現場でスタッフの方々と仕事を一緒にしていますので、距離感に大きな変化はないと感じています。

　これは、中小監査法人特有の部分かもしれませんが、他の代表社員も常に現場に近い場所で働いています。**代表社員であっても監査チーム内で深くコミュニケーションをとることができる環境があり、そのことが法人内のアットホームな雰囲気につながっている**と思います。

若いころから監査の面白さを感じられる環境

松田　監査業務に従事することの魅力について教えてください。

箕輪　私の場合は大手監査法人に勤務されている方々と比較して、早い段階から監査業務全体を俯瞰する立場で仕事をすることができ、若いころに監査の面白さを実感できたからこそ、現在までこの仕事を続けられているのだと思っています。この意味で、**中小監査法人では早いタイミングで監査業務に主体的な形で従事できる点が魅力**だと思います。

　また、中小監査法人は被監査会社数が限定されていることもあり被監査会社との距離を近くして業務に従事できる点も魅力として挙げられると思います。

志向に応じてキャリアを選択してほしい

松田　大手監査法人と中小監査法人のどちらを選択するか迷っている方もいらっしゃると思いますが、中小監査法人にはどのような方が向いていると思われますか。

箕輪　**大手監査法人と中小監査法人にはそれぞれキャリア形成に当たってのメリットがありますので、自分の性格や目標に応じて選択されるとよい**と思います。

まずは業務マニュアルや体制が確立された組織で着実に経験を積みたいという方は、大手監査法人が向いているかもしれません。一方で入所後、早い段階から自分の裁量で仕事をしたい方や、自身の興味や意欲を尊重して業務を割り振ってもらえる組織で働きたい方は、中小監査法人へ入所するという選択をしてもよいと思います。

理想の監査人を目指し今後も努力

松田　今後のキャリア展望について教えてください。

箕輪　私には語学力やIT知識など、磨くべきスキルはまだ数多くあると感じており、引き続き、監査業務に従事する中で１つずつ学んでいきたいと思っています。

特に、代表社員となった今は、コミュニケーションスキルの向上が重要であると考えています。企業の経営層の方とコミュニケーションをとる際は、話の細部よりも大枠をとらえていただくために、監査の重要なポイントやわれわれの考え方を端的に説明する必要があります。こうしたスキル向上に努めていくことで、自分の中で目標とする監査人像へ近づいていきたいと思っています。

さらなる監査環境の整備が必要

監査はアクティブな仕事

松田　公認会計士を目指していたころと現在で、公認会計士に対するイメージに変化はありましたか。

箕輪　公認会計士には、会議室にこもって、ひたすら財務諸表の数字をチェックするというイメージがありました。

しかし、実際に監査業務に従事してみると、企業の方と密に連携しコミュニケーションを取ることが求められる点に驚きを覚えました。例えば、決算書にある数値の根拠を求めて、企業が商品を製造する工場などへも出向き、現場の方に製造方法や使用する材料など細かい情報までヒアリングするなど、想像以上にアクティブな世界が広がっていました。

監査を通じて
幅広い能力を磨くことができる

松田　昨今では監査法人を退所し、監査業界を離れる公認会計士が増えていますが、監査業務を続けることにどのような魅力があるとお考えですか。

箕輪　私は今の監査法人に入所して以来、一貫して監査業務に携わってきましたが、年を経るごとに監査の奥深さを感じています。監査を担う公認会計士には、会計監査の専門知識はもとより、被監査会社の業界動向や情報、監査を円滑に進めるためのコミュニケーション力など求められるものが幅広く、努力した分だけ成長できるところが魅力だと思っています。また、監査業務の中で、アドバイザリーやコンサルティング、税務など、さまざまな業務を経験できることも魅力の１つだと考えています。

指導的役割の重要性の
社会的認知を広げる必要がある

松田　監査業務に対して、忙しく定型的な業務が多いという印象をお持ちの方がいらっしゃいます。その一方で、監査業務は資本市場のインフラを支える重要な業務であり、社会的な意義の高いものであると思います。この点についてお考えをお聞かせください。

箕輪　最近は、企業における会計不正事件の発生等の影響を受け、財務諸表に誤謬や不正がないかといった観点から財務諸表をチェックする批判的機能を重要視する傾向があるように感じています。

批判的機能は非常に重要ではありますが、企業が健全に発展していくためには、適切な財務諸表の作成や内部統制の構築のために必要な助言を行う指導的機能も重要です。

公認会計士が果たす指導的役割の重要性への認知が広がることで監査業務の社会的意義がさらに高まるのではないかと思っています。

環境整備の必要性

松田　監査業界では人手不足の状況にあることも問題視されています。このような現状を打開するために必要なことについて考えをお聞かせください。

箕輪　最近は、監査品質の維持・向上のために実施する業務が非常に多くなってきているように思います。また、手続に漏れがないようにチェックリストに記載されている事項を１つひとつ潰す作業が増えており、これらが現場の疲弊につながっているのではないかと感じています。

IT技術の活用やDXの推進を通じて業務の効率化を図っていき、職業的専門家として判断を下すことに集中できる環境を整えていく必要があると感じています。

コミュニケーションとることが重要

松田　公認会計士を目指す学生や若手の公認会計士の方々に期待されることはありますか。

箕輪　若い世代の方々は仕事に対して真面目に取り組まれる一方で、仕事以外の話題になると控えめになられる方が多いように感じられます。仕事以外の部分でも気軽にコミュニケーションをとることを心がけ、監査法人内においても、また企業の方とも、よりよい関係を構築していただければと思います。

また、監査業務においては、形式的に業務を進めるのではなく、その業務の意味を考えながら取り組むことが重要であると考えています。監査業務が高度化・複雑化する中ではありますが、１つひとつの監査手続の目的を理解し、企業に対してその手続をなぜ行うのかを明確に説明できるよう心がけてください。

読者へのメッセージ

監査業務に誇りを持ってほしい

松田　インチャージやマネージャーとして活躍している公認会計士の方々へエールをお願いします。

箕輪　昨今は監査業務が高度化・複雑化し現場で働く方にとって苦労も多い状況にあると思います。だからこそ、今一度、監査の目的を見つめ直すことが必要であると思っています。監査は、企業の財務情報を検証しその正しさを保証するという非常に重要なものであり、資本市場のインフラを支えているといっても過言ではありません。

このような高い社会的な意義を有する監査業務に従事していることに誇りを持ち、引き続き、監査の世界で活躍していただきたいと思います。

編　集　後　記

別冊第１号から第３号では、SDGsやPAIB(組織内会計士)、地域活性化の視点から様々な分野で活躍する公認会計士、地域会の活動内容等を取り上げてきましたが、その根底を支えているのは監査業務で培った知識や経験でした。

そこで別冊第４号では、公認会計士の独占業務である監査というフィールドで活躍する公認会計士にフォーカスし、監査業務の重要性や業務経験はその後のキャリア形成に大きな価値があること、また監査法人で活躍することの魅力をお伝えしたいと考え製作しました。

大手監査法人に勤務する様々な職階の方に加え、中小監査法人で活躍する公認会計士の皆様の監査業務への想いをお伺いしているほか、公認会計士と密接なかかわりのあるステークホルダーからも公認会計士への期待等をテーマとしたご寄稿をいただいていることが本誌の特徴であるといえます。

現在、監査のフィールドで活躍している会員・準会員の皆様には、本誌の内容を通じて、監査業務の社会的意義や魅力、監査法人というフィールドで活躍することの重要性や価値を再評価していただき、監査というフィールドで長くキャリアを紡いでいただきたいと思います。

また、将来の職業選択を検討している学生の皆様には、本誌を通じて公認会計士という資格の可能性、監査業務の奥深さや魅力を感じていただき、公認会計士を目指していただきたいと思います。

新型コロナウイルス感染症の拡大等の困難な状況にもかかわらず、インタビューにご対応いただいた関係者及びご多忙の折ご寄稿をいただきました皆様に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

日本公認会計士協会では、公認会計士が監査の分野でその能力を発揮し資本市場の発展に貢献することを後押しするとともに、持続可能な社会構築に貢献できるよう様々な施策を検討・実施してまいりますので、引き続きのご支援をよろしくお願いいたします。

会計・監査ジャーナル別冊製作関係者一同

Engage in the Public Interest

社会に貢献する公認会計士